

# 条河静の日常

松野椎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

八重歯が特徴のマヤちゃん。彼女には1人の兄が居る。

その兄は一体木組みの街で、どんな日常を送っていたのだろうか？

# 目次

実

33

高校生だって成長の毎日

友達と話したり遊んだり、そんな日常

が大切

1

コーヒーの飲み過ぎは

8

友達が居て、妹が居て……これを幸せ

と呼ぶずに何と云うんだろうか？

15

自作の小説が人に見られることの恥ず

かしさには、いつまでたっても慣れる気

がしないよ

26

友情はお金では買えない。でも生きて

いくためにはお金が必要なことまた事

大学生時代はミルクのように濃厚だった

思い出に耽る時間は、記憶に残る出来

事の量に比例していると思う

43

大人になっても、子供の頃の純粋な心を

持ち続けたいものだね

人は人に愛された分だけ人を愛するこ

とが出来る。これって素晴らしい永久機

関だよ

52

知らないうちに人も街もどんどん変

わっていく。でも、変わっても変わらな

いものだつてあるんだよ

61

妹だって立派に成長しているんだと気

付かされました ————— 73

みんなで勉強した後一人で勉強する

と、凄く寂しい気分になってくるよね

80

甘い物は好きだけど、自分に甘い人には

はなりたくないと言々思っているよ

93

子供の頃はできていたのに、大人にな

ると難しくなる事ってあるよね ————— 104

これまでも、これからも ————— 112

酒は飲んでも飲まれるな、と、お酒は二

十歳になつてから。この二つは本当に大

事だよ ————— 118

小さな出会いから、物語の歯車が動き出

す

人生は出会いから始まる物語 ————— 125

未来を選ぶのは、いつだって自分自身

————— 134

世の中は狭い。でも裏を返せば、そ

れって皆がご近所さんって事だよ

143

長所と短所、両方教えてくれるのは家

族と友達だけだよ ————— 152

パンは作ったことないけど、蕎麦なら

作ったことあるよ ————— 160

失敗に挫けない。よく言われるけど難

しいことだよね





# 高校生だつて成長の毎日

## 友達と話したり遊んだり、そんな日常が大切

カリカリとシャープペンシルを走らせる音が耳を支配する室内。

ふと横を見れば、グラウンドで練習を行なっているソフト部を見つめている同級生の姿が目に入る。

「おーい、翠。また部誌書かずに逃げる気かー？」

ここは文芸部。現在は1ヶ月後に控えている文化祭に発行する部誌を書き上げてるために、文芸部の皆で、といつても3人しかいないが、集まって執筆している最中なんだから……。

「あら、そんなことはないですよ？ ただちよつとソフトボール部の方へ取材に行つて、アイデアを貰おうかと考えていただけです」

惚けた答えを返してくるこいつは、青山翠。

同じ学年ではただ1人の部活仲間で、書く作品はどれもプロのように上手いのだが、書き始めるまでに取材だアイデア探しだと言つて、ふらふらと他の部活に行つては勝負を仕掛けられたり、適当なアドバイスをしたりしている自由人だ。

「もう、翠ちゃんはすぐにふらふらとどこかに行っちゃうんですから！　少しは探しに行く私とシズ先輩のことも考えて下さい！」

翠の言動に反応して頬を膨らませているのは真手凜。

特待生として入学してきたほど勉強ができるひとつ下の後輩だ。

部活では、自分は上手く文章を書けないからと言って、主に文書校正や印刷などの雑用をメインに活動しているはずなんだが、最も多い仕事は翠を連れ戻して部誌を書かせることという苦労人でもある。

尤も、凜もその追いかけて楽しむ節が見られるから、なんとも言えないがな。

ちなみに、彼女が言ったシズ先輩というのは僕のこと、本名は条河静。9歳年下の可愛い妹がいる高校3年生だ。

この部の部長もやっているが、正直僕としては部長の座は凜が一番相応しい気がする。翠を捕まえられるの凜だけだしな。

「でも凜ちゃん？　私はここに座っていてもアイデアが浮かんでこないようですから、アイデアを探しに行かせた方が部誌のためには良いと思いますよ？」

「翠ちゃんはアイデア探しだと言って外に出たら戻ってこないでしょう！」



確かにその通りだ。一度文芸部から出たつきり、吹き矢部で下校まで吹き矢勝負していたなんて事も、1年生の頃はざらにあった。

まあ、最近ではそれも落ち着いてきてある程度満足したら自主的に凜に捕まつてここへ戻つてくるようになったがな。

「ほらシズ先輩！先輩からも翠ちゃんに何か言つてやつて下さい！」

こちらに話題を振ってきた張本人は、頬を膨らませながら唇を尖らせて、いかにも私怒つてますというような顔をしている。

それに引き替え翠は、どこか楽しそうな雰囲気を出しながらもいつもと同じ穏やかな笑顔でいる。

まだ時刻は午後4時。部活を終わらせるには些か早い気がするが……

「はあ、しょうがない。ここに居ても部誌は出来なさそうだし、ラビットハウスに場所を移すとするか」

その言葉を聞いて、瞳を輝かせて心からの嬉しそうな笑みを浮かべる翠。

それとは対照的に、やれやれといった表情をしている凜。

「まったく、先輩は翠ちゃんに甘いんですから……」

「あの一、一応私も先輩なんですけども……」

「翠ちゃんには私に苦勞させてるから、先輩というよりむしろ手のかかる妹だよ！」

なぜだろうか。凜が翠にお姉ちゃんと呼ばれる姿が全く想像つかない。

どっちかと言えば、凜は姉にからかわれる妹のような気がする。

「だとしたら、シズ君は私たちのお兄ちゃんでしょうか？」

翠の言葉に少し考える素振りを見せた凜だったが、何を思ったのか上目遣いで僕に対して、

「お兄ちゃん……？」

と甘えた声で言ってきた。

「ぐはっっ!!」

「せ、先輩大丈夫ですか！」

「あらあら」

その破壊力抜群の台詞に思わずハートを射貫かれてしまった。

翠は僕が悶えているのを可笑しそうに見ている。凜は心配してくれているが、この状況を作り出したのは君なんだが……。と突っ込みをいれなくなった。

結局、次に僕が言えたのは、

「は、早くしないと日が暮れちゃうから、さっさとラビットハウスに行こうか！」

という、無理矢理話題を変えたような返しだった。

「ふふ、そうですね。ではせっかくですから、ラビットハウスまで競走しましょうか！」  
急な話題転換に乗ってくれたのか、はたまた天然なのか、きつと前者だと思いが、翠はそう言つていの一番に部室から駆け出した。

「ちよ、ちよつと待つてよ翠ちゃん！」

一瞬驚いて固まつたが、すぐにいつものように翠を追いかけ始める凜。

部室に一人取り残された僕は、文芸部の姉妹はまるで台風のような感じで思いながら、僕は部室の鍵をポケットに入れて職員室へとゆつくりと歩き出した。

「つたく、競走するなら部室の鍵を返してからにしようぜ……。圧倒的に不利じゃないかよ。」

「シズ君〜！ 着くのが一番遅かった人の奢りですからね〜！」

廊下の向こう側から聞こえてくるそんな声に苦笑しながらも、たまにはそんな日もいいかと思ひ、制服の内ポケットに入れてある財布の中身が十分であることを確認するのであった。

「先輩ー！ 早くしないと翠ちゃんと先に行つちやいますよー！ 期間限定のコーヒーぜんざいも頼んじやいますからねー！」

「分かつた分かつた！ すぐ行くよー！」

競走と言ひながらも、待つていてくれる優しい後輩と同級生のために、ゆつくり歩い

ていた足取りを少し早めて、小走りに職員室へ向かった。

鍵を顧問の先生に返したときに、何か良いことでもあったのかと聞かれたが、それはきつと、この文芸部の3人での日常が、とても素晴らしく大切なものだと思ついたので、なんだと思う。

この日常がいつまでも続けばいいのになど、柄にもなく思つてしまつた高校3年生の9月の終わりの日。

「先輩遅いですよ……」

「それでは行きましょうか」

二人の顔を見ると、大切な日常をくれていることに、感謝の気持ちが溢れてきて、

「二人ともいつもありがとうな」

と、口からするりと言葉が出てきた。

そんな急なお礼の言葉に目をきよとんとさせた二人だったが、すぐに、

「どういたしまして！」

と満面の笑顔で言ってくれたのだつた。

秋のお彼岸も過ぎて、うだるような暑さに代わり、ようやく涼しげな風が吹き初めて

来た頃、木組みの街では姉妹のような2人とそれを微笑みながら見守る1人の兄が仲良く歩いていたそうだ。

学校の中では少しだけ有名な彼らは、からかい半分にこう呼ばれている。

「文芸部3兄妹」と。

## コーヒーの飲み過ぎは

ラビットハウス。そこは、この木組みの街の中でも知る人ぞ知る隠れた名店だ、というのは経営しているマスターの談である。

実際の所、コーヒーはとても美味しいし、店の中は落ち着いている良い雰囲気であるし、白い髭のマスターは映画俳優ばりにダンディーであるので、名店というのは間違いないだろう。

カランカラン

「いらっしやい」

手元のコーヒーカップを拭きながら、初めて来た人にはぶつきらぼうだと思われる渋い声で迎えてくれるマスター。

かくい僕も、初めてラビットハウスに入ったときは、なんだこの人と思ってしまうた。しかし、出されたコーヒーを飲んでマスターと話をしてみると、根はとても優しいお爺さんなんだと分かった。それと同時に、とても経営に苦労しているということも知った。それ以来、暇を見つけてはここにコーヒーを飲みに来るようになった。

「マスター、ブレンドコーヒーを三つ。一つは砂糖二つにミルク一つで」

注文の声を聞いて、カップから顔を上げてこちらを見やるマスター。その顔には少し嬉しそうな笑みを浮かべている。大方、ここ1〜2時間客が居なくて暇だったから、久しぶりにコーヒーを入れられるのが嬉しいんだろう。

「あ、あと甘兎庵とのコラボメニューだというコーヒーぜんざいも三つ下さい」  
「え、いいんですか先輩！」

「僕もコラボの話聞いたときから、食べてみたかったからね。勿論、二人の分もちゃんと奢るから気にせず食べて」

約束は約束だ。ラビットハウスに着くのが一番遅かったのは僕だからね。

それにしても、普段おっとりしているように見える翠だが、走るのが速いこと速いこと。そして、週5のペースでそんな翠と追いかけてを繰り返している凜も体力が付いたのか、ほとんど息を乱さずにラビットハウスまで来ていた。結構距離あるんだがな……。

それに引き替え僕は、二人の高レベルな追いかけっこについて行けず、途中でバテて断念した。その後はのんびりとまではいかないが、息を整えながら小走り程度でやって来た。

先にラビットハウスの前まで到着していた翠と凜は、僕が着くのを待っていてくれたようで、またもや遅いですよと言われてしまった。

違うんだよ……。君たちが速すぎるんだよと声を大にして言いたい。二人には実感ないんだろうけど、きつと陸上部でもまともに張り合えると思う。

しばらくの間、店内にはマスターがコーヒーを淹れる音が響き渡った。

このコーヒーは、香りも風味も最高だが、コーヒーを目の前で淹れてくれるところも重要なポイントだと思う。

一流のバリスタというのは、マスターみたいな人のことを言うんだろうな。

「コーヒーが出来上がる過程を眺めていると、心が落ち着きますね」

どうやら翠も、僕と同じ意見なようだ。さすが僕よりも入り浸っているだけはある。

翠は本当に毎日と言って良いほど、ここに通い詰めているらしく、いつも決まっている杯のコーヒーを頼んで、マスターに、自分が書いた小説の感想を聞かせてもらっているそうだ。

というか、僕たちより先に、マスターに小説の原文を読ませているというのは、同じ部活の仲間としては少々寂しい気分になる。

「どうぞ、ここ注文のブレンドコーヒーです」

マスターから差し出される淹れたてのコーヒー。

ひとくち喉に流すと、いつも通りの美味しい味が口の中に広がる。

「コーヒーぜんざいはもうしばらくお待ち下さい」



「コーヒーを淹れたマスターは　ダンディーな声を発しながら、店の奥へと入っていった。」

「マスターは相変わらず素敵な声をなきつてますね〜」

「翠ちゃんはほんと、マスターのことが好きなんだから……」

真つ先に小説の原案を見せるのがマスターであるのに嫉妬しているのか、凜は翠の言葉に拗ねている。

「翠ちゃんは、同じ部活の私たちよりもかつこいいマスターの方を信頼しているんですね……」

「そんなことないですよ。私は凜ちゃんやシズ君のことをちゃんと信頼も尊敬もしています。」

「それなら、どうしてマスターが一番最初に見せるんですか！　ほんと翠ちゃんは

私たちの気持ちを考えてないんだから！　物書きとして失格ですよ！」

翠のその場しのぎのように聞こえる反論に、凜は声を荒げて翠を糾弾した。しかし怒ったような声に反して、凜の顔は悲しげな顔をしている。きつと凜は翠に怒っている訳ではなく、翠が自分を信頼してないような行動を取っていることが悲しかったり、なにより信頼してもらえない自分が腹立たしいんだろう。

険悪な雰囲気になってしまったラビットハウスの店内。あわや、一触即発という状況

を覆したのは奥から出てきたマスターだった。

「ははは、青山は毎日来てくれて、作文用紙に書いた小説を読ませてくれるが、どうやらそれは君たちに書きかけの文章を読ませるのは恥ずかしいかららしい」

「それって、ほんとですか……?」

翠の方を見てみると、彼女はちよつぷり恥ずかしそうに頬を染めながら、それを誤魔化すようにコーヒーを啜っていた。

「もう〜マスターなんで言っちゃうんですか〜!」

折角秘密にしていたのに〜!」

翠は頬を染めながらも、ぷく〜と可愛く膨らませてマスターにぷりぷりと怒っている。凜の方を見てみれば、驚いた顔をしている姿が目に入った。しかし、まだちよつと信じられていないのか怪訝な表情も浮かんでいる。

まったくしようがないなあ、翠のために僕は少し後押しすることにした。

「翠は凜を信頼していないんじゃないかと、凜を信頼しているから、大事な友達だと思っっているからこんなことをしたんじゃないかな?」

「それは……それは本当ですか?」

翠ちゃん?」

「もう、バレてしまっただけはどうしようもないじゃないですか。そうです、私は凜ちゃんに稚拙な文章を見せてしまっただけで嫌われてしまっただけでどうしようも考えた結果、マスターに感想を頂いてから翠ちゃんに見せるようになったんです!」

翠は自分が心に秘めていたことを一気に述べると、ぷいとそっぽを向いた。髪の毛の隙間から見える耳は話を聞いていなくても、すぐに恥ずかしいんだなと分かるくらい真っ赤に染まっていた。

「…………ふふっ」

凜の方から、嬉しそうな笑い声が聞こえたと思つたら、

「みーどーりーちゃあーんー！」

と言つて、そっぽ向いている翠の背中に抱きついた。

翠の顔はこつちからは見えないが、きつと驚きに染まっているだろう。でも、きつとその後には二人とも笑顔が顔一杯に広がっているんだろう。

二人が元の鞆に収まつて、いや、それ以上に親密になつたようで心から安堵した。

……マスターには感謝しないとな。

「マスター、」

「ん、なんだ？」

「ありがとう」

僕の言葉に返事をするでもなく、マスターはただただ口の端を持ち上げて、不敵な笑みを浮かべるのであつた。そして3つの深皿を取り出して、

「こちら、コーヒーぜんざいです。どうぞ。」

と、差し出してくれた。

コーヒーのように苦い思い出はミルクと砂糖を入れて甘い思い出に変えられる。きっと人生つてそういうもののかな？　なんて、甘い考えを抱きながら、僕たち

はコーヒーぜんざいに舌鼓をうち、部誌を書く準備をするのであった。

友達が居て、妹が居て……これを幸せと呼ばずに何と  
言うんだらうか？

現在、夜の6時。既に日は沈み、暖かな色をした街灯の無機質な灯りが木組みの街を  
穏やかに照らしてる。

お互いが心の中で思っていたことを腹を割って話した結果、これまでよりもっと仲  
良しになった翠と凜は、結局凜は文芸部の編集者なので、翠の文章が稚拙だろうと書き  
かけだろうと、まず最初に見せるべきだということに落ち着いた。ちなみにマスター  
には完成版の原稿を見てもらおうということになった。

そう決めた後に本題である、部誌の原稿を書き上げるという事に入ろうとしたが、残  
念なことに、

「話が弾む気持ちは分かるが、もう日も暮れたことだし、今日はその辺で切り上げて帰り  
なさい」

という時間切れ宣言を、マスターから孫を見守るお爺ちゃんのような優しい笑みで言  
われてしまったので、帰る支度をして一言、

「また来るよ、マスター」

「また来ますね、マスター」

「マスター、どうもありがとう。ございました。また来ますー!」

と、僕、翠、凜の順番でそれぞれマスターに挨拶をしてラビットハウスを出た。

その後、翠と凜とは家が逆方向にある僕はラビットハウスの前で二人と別れたのだった。

家に帰る途中、今日は色々あつたけど楽しかったから時がたつのが早かったな、なんて考えながら歩いていると自分と同じようにこれから帰るのであろう人で混み合っている広場の中から、

「え〜! まだ帰りたくない!」

と、幼い少女の声が聞こえてきて、ああ、楽しい時間があつという間に過ぎてしまうのは幼い子供でも、来年の頭に受験を控えている高校生でも同じなんだなあなんて妙なことを納得しつつ、遅くならないうちに早く帰ろう、と帰路を急ぐのだった。

「ただいまー」

我が家に帰ってきた僕は、玄関の扉を開けて帰宅を告げる言葉を発した。すると居間の方からドタドタという何かが走ってくる音が聞こえてきたと思つたら、次の瞬間、

「シズにい、おかえりー!」

と、妹のマヤが僕の胸めがけて飛び込んでくる姿が目映った。

元氣いっぱいなのはいいことだけど、そろそろお淑やかさも学んだ方がいいんじゃないかなと心の中で苦笑した僕は、妹を受け止めるために腕を広げた。

ポフツ

何とも可愛らしい音を立てて僕の胸に抱きついてきたマヤ。早いものでもう小学3年生になる。ちょうど、マヤが産まれてきたときの僕と同じ年齢だ。

「へへっ！ シズにいが帰ってきたら絶対にぎゅゅって抱きついてやろうと思ってたんだ〜！」

その愛らしい台詞に、一瞬シスコンの道に目覚めてしまいそうな錯覚を覚えたが、なんとか持ち堪えることが出来た。翠と凜からは、もう十分シスコンだと言われているが、それは気にしないことにしている。

ところで、心も体もどんどん成長していつているマヤだが、何故かここ最近はどうも甘えん坊になっていつてる。どうしようか、このままだと来年度、僕が遠くの大学に行くために一人暮らしするようになったら耐えられない。マヤではなく僕が。

そうやって頭の中で少し先の未来のことを妄想して悶えていると、マヤから、

「どうしたのシズにい？ どこか具合でも悪いの？」

と、胸に抱きついたまま、下から顔を覗き込むようにして心配そうな顔でそう言われ

たので僕は、

「いや、なんでもないよ」

と言つてマヤの頭を撫でてやるのだった。さすがに妹離れできるか心配だったなんてマヤには到底いうことはできない。

誤魔化すように撫でた僕だったが、マヤは気持ちよさそうに目を閉じて、幸せそうな顔をしている。

そんな顔を見た僕は、ああ、もうシスコンでも良いかもしれないと気持ちが傾くのであった。

……どうやら僕は頭の具合が良くないようです。別に勉強が出来ないわけではないですし、偏頭痛持ちであるわけでもありません。ただちよつとだけ妹に関しての部分が壊れかかっているだけなんです。けれども、これは手術をしても治せない不治の病です。

頭の中でシスコンという病気についての考察をしながら、マヤの頭を撫でている手を止めその代わりに両手でマヤを抱っこして居間へと移動するのであった。

時間は過ぎて夕食後、マヤと一緒にゲームしようと誘われた僕はテレビに繋ぐゲームで、アクション系に分類される人気キャラクター達が一堂に会して、そのキャラクター



達の世界観をモデルとしたステージ上で戦うゲームを行っていた。

「よっしやー！ また勝った！」

「本当にマヤは強いな」

「だって、シズにいに負けないようにいっぱい練習したもん！」

8年ほど前に買ったゲームで、昔は男友達ともよく対戦していたんだが、今では勉強に時間をとられたり、小説を書くのに夢中になっていたりしてまるでやらなくなっちゃった。

きつとゲームソフトを保管している箱の中で眠っていると思っていたんだが、いつの間にかマヤが取り出していたらしい。

それにしても、いくら自分にも3〜4年のブランクがあるとは言え、マヤがとんでもなく強い。こちらの動きを完璧に読み切っている。マヤは何に対しても好奇心を示すので、飽きっぽい性格さえなんとかなればどんなことでも上手くできるだろうとは常々思っていたが、まさかこれほどとは……。恐ろしいまでの才能を感じた。

「メグったらね、これやったらいっつも私の事、あと一発つてところまで追い詰めるの到最后はミスって落ちちゃうんだよー」

メグちゃんっていうのはマヤと幼馴染みの、天然で純粋なおっとりしている女の子だ。マヤとメグちゃんは以心伝心で、お互いに考えていることがなんとなく分かるそう

だ。

でもまさかメグちゃんがそんなにゲームが上手いとはな……。あれ、もしかして僕が下手なだけなのか？

ちらつとマヤの方を見ると、大きくのびをしているのが見えた。

「ん〜！ よしっ！ シズにいいにも勝ったことだし、お風呂に入ってくるか！」

どうやらゲームの時間はもう終わりのようだ。妹に負け越して少し悔しいが、これ以上やったところで敗北を重ねる未来しか見えないので、良い頃合いだろう。

「ねえ、シズにいい？ 今日は一緒にお風呂入らない？」

不安そうにそう尋ねてくるマヤ。これには少し驚いた。しばらく一緒に風呂に入っていないなかったのに。

これはいくらなんでもおかしいなと思った僕だったが、さすがに小3になってまで一緒に入るわけにはいかないだろうと考え、風呂には一人で入ってきなさいと言うのであった。

カリカリ……パタン

「ふう、これでとりあえずは今日の勉強は大丈夫だろう」

時刻は現在23時30分。1日の学習時間が2時間というのは、受験生としては到底足りるものではないだろうが、それでも模試の偏差値は志望校を優に超えているので大丈夫だろう。先生にもお前なら大丈夫だろうと、お墨付きをいただいていることだしな。

さて、床に就くかとベッドの布団を捲るとそこには眠たそうに目を擦っているマヤの姿があった。

「……マヤ、ちよつと奥に詰めてくれないか。僕が入りきらない」

風呂の時に続いてこう立て続けに近くに寄ってくるということは、本当に何かあっただろう。それを聞いてあげるのは僕の兄としての役目だろう。

「どうしたいんだい、マヤ？ 今日はやけに甘えん坊じゃないか」

マヤは返事の代わりに僕にぎゅつと抱きついてきた。……しばらく待っていると、マヤが口を開いた。

「シズにいはさ、大学に行ったらこの家から離れちゃうんでしょ？」

「ああ、確かにここからじゃ通えない距離の大学を目指しているから、一人暮らしをしようと思っているな」

それを聞いたマヤは悲しそうな顔をして、今にも涙を流しそうな程瞳を潤ませている。

「シズにいがき、ここからいなくなっちゃうんだと思ったらき、えぐつ、さみしくて悲しくてき、ひぐつ、だからシズにいに思いつきりくつつけばだいじょうぶななるかなって思ってたんだけど、うう、やっぱりだめだったよ」

ああ、なんだ、僕だけじゃなくてマヤも不安だったんだ……。それに気づいてやれなかったなんて、僕は兄失格だな。そう自分を咎めた僕は、なるべくマヤに優しく言葉かけるのだった。

「でもねマヤ、僕はもう二度と帰ってこない訳じゃないんだよ。長期休みの時は毎回絶対帰ってくるし、なにより大学の4年間が終わったらそれから、僕はずっとこの家にいるつもりだよ。だから大丈夫」

「ほんとう……?」

「嘘じゃないさ、それにねマヤ。マヤも寂しいだろうけどね、僕だってマヤと同じくらい寂しいんだよ。」

これはまごう事なき事実である。

「シズに何も寂しいの?」

「ああ勿論さ。だからね、僕が寂しくないようにマヤは手紙を送ってくれないかな?」

そうしたら、きつと僕も頑張れるに違いないよ。僕もそうしたら手紙を送り返すからね。」

「うん……うん！ 分かったよ！」

「よし、じゃあ約束だ」

そういつてくしやくしやくと頭をかき回してやると、もうマヤの顔からは悲しい表情がなくなっていた。

それからマヤと一緒に指切りげんまんをして、そのまま同じ布団で寝るのだった。

「おはよう兄貴！」

朝起きると、開口一番にマヤからそういつた言葉ができた。

「おはようマヤ……えつと兄貴っていうのは何だ？」

「シズにいが新しいことをするんだったら、私も新しいことをしてみようと思つてね！」

「いいでしょ兄貴！」

まさか、昨日まであんなに甘えん坊だったマヤから兄貴なんてかっこいい言葉がでてくるとは思わなかった。本当に子供つてあつという間に成長していくんだなと心から痛感した。

嬉しいような寂しいような、言いようのない感情に身を任せて頭をガシガシ搔いた僕はとてりあえず、

「わわっ！ どうしたの兄貴！」

マヤをぎゅゅと抱きしめるのだった。

ついこの間まで、よちよち歩きの赤ん坊だと思っていた妹がいつの間にか小学校に入  
学していて、兄離れするような年になっていたんだと実感させられた日だった。

……楽しい日々はあつという間に過ぎてしまうことを考えると、僕は妹が出来てから  
いままで、毎日が楽しい日々の連続だったんだろうかと、幸せな感情が心の中から溢れ  
出てくるのであつた。

「マヤ、」

「どうしたの兄貴？」

「ありがとう」

「……えへへっ、どういたしまして！」



自作の小説が人に見られることの恥ずかしさには、いつまでたつても慣れる気がしないよ

いつもは静かな文芸部の部だが、年に一度耳が痛くなるほど騒がしくなる日がある。

そう、文化祭だ。尤も、僕もこんなに人が集まるとは予想だにしていなかったがな……。

文化祭当日、文芸部の部室は、僕たちが一年間書きためてきたアイデアをまとめて部誌という形にしたものを頒布する会場となる。この前僕たちがラビットハウスで険悪なムードになった原因は、その部誌の中に掲載されているいくつかの文章のうち、翠が最後に仕上げる予定だった大長編の小説についてであった。

ちなみに部誌に載っている文章は、僕が短編小説5編と、数学や英語を使いながら謎を解決していくミステリー小説が1編の計6編で、わりと書けた方だなと思っていたんだが、なんと翠はさつき話にでてきた大長編小説だけでなく、その他に2編の長編小説を書いていたみたいで、格の違いを見せつけられてしまった。

翠が書いた小説が一体どんな内容かというと、まず1つはうちの学校の吹き矢部を題材にして書いた少年漫画のようなスポ根小説。その躍動感溢れる描写にはさすが翠だ



など感動させられた。

次に何を思つて書いたのか、テニスと社交ダンスが融合された、踊つて打つ謎のスポーツの小説。これを読んでまず最初に考えたことは、翠の頭は大丈夫なのか、ということだった。失礼に聞こえるが、あまりにもおかしい内容だったので、この感想は間違つてないと思う。凜、よくこれ許したな……。

そして、最後に大長編小説だがこれは凄かった。これでも文芸部の端くれだから、これまでかなりの量の本を読んできた僕だったが、その中でも1、2を争うほど感動した作品だった。ラビットハウスをモチーフとした作品で、マスターの苦労話や最近始めたバータイムのことも中身に取り入れられている。『うさぎになつたバリスタ』なんてファンタジーチックな題名に反して、親子の愛情や、かつては敵だった人との友情などが盛り込まれていて、人々の人生が複雑に絡み合いながら最後にはハッピーエンドを迎える、というお話だった。

……不思議と、これが本当になるような気がしてならなかったのは気のせいだろうか。そうだとしたらこれからはうさぎに気をつけなとな。もしかしたらマスターが化けているかもしれない。

上のような感想を翠に直接述べたところ、

「凜ちゃんに言われてなるべく短くしようとはしているのですが、どうしても長くなつ

てしまうんです」

と、少し疲れた顔で何とも羨ましい悩みを告げてきた。しかし話を聞いていると、どうやら凜から、

「コピー代も用紙代もバカにならないんですから、短めにしてくださいー!」

と書く前に言われていたようなので、きつと仕上げた文章を見せたときに小言を言われたんだらう。疲れた顔の理由に納得いった。それでも、この長い文章を全部載せて印刷しているあたり凜もこの小説達のが好きなんだらう。なんてつたつて翠の一番のファンだからな、凜は。

とはいえ、個人的にはあの謎スポーツ小説は削つても良かった気がする……。どこの層に需要があるんだらうか？

さて、そろそろ文化祭が始まる時間だ。昨日のうちに凜が刷ってくれた小説の冊子を段ボールから取り出して机の上に並べる。B5用紙に印刷された紙の厚みはおよそ辞典並と、とんでもないことになっている。そんな笑っちゃう量の部誌だが、凜が昨日一日中頑張ってくれたので、段ボールを開けて用意すると全部で100部。このうち僕たちが1部ずつ貰う予定なので、来客者に配るのは97部ということになる。

ちなみに去年は僕たち以外にも先輩が居たので、こんな分厚いものにはならなかった

が、確か200部刷ってギリギリ頒布できたんだった気がする。最後には残部を配り歩く羽目になったのは、忘れられない記憶だ……。

去年より部数は少ないものの、こんなに厚い冊子を配りきれのかと内心不安になりながら準備を進めていると、隣で僕と同じように作業していた凧が、

「先輩、この部誌なんですけど、部費の関係上これしか刷れなかつたんですが足りるでしょうか……?」

と言ってきた。え、なんだって? これしかだって? 確かに翠の小説は面白いし、

凧が担当した表紙のデフォルメされたうさぎの絵も大変可愛いが、さすがに足りないって事は無いだろう。そう思い、申し訳ないが凧には反論させてもらおうと思っていると、僕より先に翠が、

「足りなかつたら、そのときは先生に頼んで追加分を作って貰いましょう!」

と言いだしたので、あまりにも驚いてしまった僕は、

「ちよ、ちよっと待ってよ! この分厚い冊子がそんな100部近く配りきれるとは、僕には到底思えないよ!」

と、言ってしまった。すぐに、やってしまったと思つた僕は、翠と凧が気を悪くしてしまつたのではないかと思ひ二人の顔をうかがつたが、どうも僕の考えは外れたようで、二人はお互いにきよとんと目を合わせている。

そして数秒の沈黙が室内を支配した後、翠と凜は狙ったように声をそろえて、

「それはいいですよ！」

と、否定の声をあげた。その後が続けて二人は、

「先輩はあまり気づいていないようですけど、先輩も翠ちゃんもプロの小説家みたい、つて学校の中では評判なんですよ」

「そうですね、私もシズ君の小説は勉強になる、と取材した先々で褒められたことは1度や2度のことではありません。もっと自信を持って下さい！」

「そう言われてもなあ……翠のならともかく、僕の小説に高い評価が付くなんてありえないよ」

素直に思っていることを口に出した僕だったが、それを聞いた翠と凜は怒っているような顔をして、

「もう！ 先輩はほんつとうに自分のことを卑下するんですから！」

「凜ちゃんの言うとおりですよ！ 過ぎた謙遜は嫌味になるんですからね、シズ君！」

と、怒られてしまった。僕そんな卑下とか謙遜していいものにな……

「まだ信じていない顔してるんですから……。分かりました！ そんなに心配なら証拠を見せてあげましょう！」

そう言われて二人に腕をつかまれながら、部室の外に引つ張り出された僕は、自分の

目を疑うのだった。

「ね、言ったとおりでしょ！」

そこに見えたのは人、人、人、廊下一杯に広がっている人の姿がだった。そして、その人の集団は皆文芸部の前に並んでいたのであった。このあまりに現実的でない光景に思わず呆然と立ち尽くしてしまつたが、やっと見られるのか、と待ちわびた声や、青山先輩の小説も条河先輩の小説も楽しみだね！と言つた声が聞こえてくると、心の中から嬉しいような恥ずかしいようなむず痒い感情がわきあがってくるのだった。

「さすがシズ先輩と翠ちゃんです！」

と、いつてドヤ顔をしている凜。こちらは自分についても言われているのが恥ずかしいのか、ニコニコしながら頬を赤らめている翠。

それにしても、去年は全然こんな人が来るなんてことはなかったのに何でこんな状況になつているんだろうか？　そういった疑問がふと頭をよぎると、凜が見透かしたように答えを教えてくれた。

「去年、文芸部では部誌のことを全く宣伝しなかつたですよ。だから文芸部には、当日気づいた人しか来なかつたみたいなんです。ですが、部誌を読んでくれた方はこの小説面白いと言う人がほとんどでした。なので今年はその反省を活かして、夏休み明けからちまちまと宣伝活動を行つていたんです！　まあ翠ちゃん探しのついでですが……」

「それは、私がアイデア探しに色々な所をまわっていたおかげ、ということでしょうか？」

「た、確かにビラ配りとかする手間は省けたけど、それとこれとは話が別だよ！」

どうやらうちの凜さんは、僕が思っている以上に優秀だったようです。将来経営者とかになつたらいんじゃないかな。それに、翠も知らず知らずのうちに文芸部の知名度アップに貢献していたようで、僕の小説を読んでもらえる人が増えて人気になつたらしいのは、やっぱり僕が原因ではなく翠と凜のおかげだったようです。

その後、翠、ペンネームで言えばミス・エメラルドと、そのミス・エメラルドを唯一連れ戻せる存在である凜の活躍により一躍人気となつた文芸部では、文芸部3兄妹が部誌を嬉しそうに手渡す姿が見られたという。そして、そんな三人の表情を見た人々は、部誌のあまりの分厚さに吃驚しながらも、これからもこの文芸部を応援していきたいな、と思うのであつた。

こうして、文芸部3兄妹は噂として学校内で語り継がれていくのであつたが、そのことはまだ誰も知らない……。

友情はお金では買えない。でも生きていくためにはお金が必要なことでもまた事実

「こちら、ご注文のブルーマウンテンです」

マスターがそういって、僕たちにカップを差し出してくれた。コーヒーを一口啜ると、適度な酸味とコク、上品で甘い香りと柔らかな舌触り、甘みのある後味のバランスが絶妙な感じで口の中に広がり、さすがコーヒーの王様と呼ばれているだけあるな、と心が和らいだ。

文芸部は、文化祭を大盛況で終わらせて、閉会式では最優秀部活発表賞という、部活動での展示に設けられた賞で最上位の賞も頂く結果に終わった。しかし、問題も一つ起きてしまったのだ。

僕と翠が、小説家にならないかとスカウトされた。

それはお昼をまわってすぐ、早くもあの97部の部誌を全て配り終わるといふ快挙を成し遂げた直後のことだった。真面目に追加の冊子を刷ろうかと検討している翠と凛と、それを必死に止めようとしている僕が会話していると、休憩中と書かれた板を部室の扉の前置いたのにも関わらず、急に扉が開き外から、営業スマイルを顔に貼り付けた

中年の男性が入ってきて、

「どなたが翠さんと静さんでしょうか？」

と、僕たちを見回して挨拶も謝罪もなしに聞いてきたので、不審な目を向けつつ、何かしてきたらすぐに翠と凜を守るように一歩前に出て、その胡散臭い笑みの男性を注意深く観察していると、

「申し遅れました。わたくしは生論社の編集部に勤めている山本と申します。」

と懐から名刺を取り出してこちらに渡してきた。生論社、出版社の中では結構有名な会社だ。しかしネットでは、売り出している本は多くせして大ヒットしたものは一つも無いと、辛口な評価が付けられている。

そんな会社の人が一体何の用事で来たのだろうか？ 名刺を受け取りそう聞いてみると、

「この学校の文芸部が作った部誌の中身が凄いと、数時間前からネット上で話題になっていたんです。それで気になったわたくしは、弊社からこちらに急いで来まして、どんなものかと読ませて頂いたのですが、いやはや、それにしてもこのお二方は高校生と若いながらに、小説を書くのが上手いですね。この『うさぎになったバリスタ』なんかは、すぐにでも弊社から出版出来すよ！」

あまり要領を得ない説明で、こちらの質問に解答しないという社会人としてどうなの



かと思わされる答えだったが、要はこの人は小説家にならないかというスカウトなんだろう。

「では改めて尋ねますが、あなたはここへ何をしに来たのでしょうか」

半分答えを予想しながらもう一度同じ質問を繰り返すと、その男性、山本さんは、「これは失礼しました。つまりわたくしはこの部誌を書かれた方を、弊社の新人小説家としてデビューさせたいと考えているのです。それで、これを書かれたという翠さんと静さんはどちらの方ですか？ どうやらお一人小説を書いていらっしゃる方がいるようですが」

男の最後の言葉に棘を感じた僕は、何か凜をバカにされたような気がして怒りを覚えたが、ここで怒ったところでどうしようもないと思い直して、

「静は僕です」

と、男を少し睨み付けながら手をあげるのだった。そのままちらつと横目で翠の方を見てみると、いつも楽しそうに穏やかな笑みを浮かべている顔は、眉をつり上げて口角を下げ、目を鋭く細めていた。大抵のことでは動じない翠には珍しく、僕と同じように怒っているようだ。それも当然か、だって凜は翠の担当編集者、相棒だもんな。

それで当の相棒である凜の表情も確認しようと反対側に目を向けたところ、そこには喜びの表情を浮かべている凜の姿があった。予想外のことと思わず二度見してしまっ

た。

「おい、凜なんでもそんな嬉しそうな顔しているんだ」

小声で尋ねた僕の質問に対して凜は、

「だって、先輩達の作品がこうやって評価されて、出版社の方から直々にスカウトされたんですよ！ 嬉ばしいことじゃないですか！ それなのに何で先輩方はそんなに怖い顔しているんですか？」

……驚いた、凜はあの出版社の男から一人だけ仲間はずれにされているっていうのに、気丈にも僕たちのことを祝福してくれている。凜の顔をよく見てみると、嬉しそうな表情に混じってどこか悲しそうな、寂しそうな表情も見られるので、あの男の棘の付いた言葉に気づいていないわけではないようだ。まったく、本当に凜は強い後輩だよ……。

そしてそのまま凜は、編集部の男に聞こえるくらいの大きな声で言葉で、

「翠ちゃん、いや、青山先輩はあっちの方です」

と言い、翠の方へ手を差し向けるのだった。すると、男は初めて作り笑いをやめ、本当の笑顔になって、

「おお！ そのお二方がそうでしたか！ それでは、是非とも我が生論社からヒット作を出すために、これから末永くよろしくお願いしますよ！」

と、あたかももう僕たちが生論社で小説家としてデビューするかのようにつてきたので、

「ちよつと待つて下さい！僕たちはまだ何も言つていません。勝手に決めないで下さい！」

すかさずそう返した。編集の男は驚いた顔をしている。これはあくまで予想だが、この男は文芸部に所属しているような高校生なんてみんな小説家に憧れているんだらう、だからちよつと出版するとかちらつかせればすぐ靡くに違いないさ、なんて考えているんだらう。

自分の想像とはいえ男に無性に腹が立った。すぐにでもその男にお帰り願いたいと思つた僕は、冷たく追い返そうとしたその時、これまで一言も言葉を発していなかつた翠が、

「この件はよく話し合つて決めたいと思いますので、今日の所は一旦お引き取りください」

と、丁寧な言葉を能面のような表情で言つたのだつた。翠とは高校に入つてからもう3年の付き合いになるが、今までこんな表情は見たことない。

普段感情豊かな人が無表情になるといふことに、自分に向けられているものではないと分かつていながらも、僕は底知れない恐怖を感じた。どうやらそれは僕だけではなく

男も感じたらしく、引き攣った笑みになって慌てて、

「そ、それではお決まりになりましたら名刺の方の連絡先へお電話下さい。色よい返事をお待ちしてます！」

と告げて、脱兎のごとく逃げ出すのであった。その後、翠は凜と僕に、

「文化祭が終わった後、三人でラビットハウスで話しましょう」

と、真剣な眼差しで言うのであった。凜はその言葉に快く頷き、僕ももとよりそのつもりでいたため頷くのであったが、その提案を告げたときの翠の口調には有無を言わせぬ迫力があつた。

……こうして今に至るわけだ。

普段カウンターでコーヒーを飲む僕たちだが、今日はテーブル席に顔と顔を突き合わせて座っている。

しばらくの間、コーヒーを啜る音に支配されていたラビットハウスの店内だったが、凜が口を開き、

「青山先輩、何であの生論社の方がいらつしやつたときに小説家になることを即決しなかつたんですか？ 小説家になるのは、先輩の夢じゃないですか」

青山先輩、と他人行儀な呼ばれ方をされた翠は、飲んでいたコーヒーのカップを、優雅にソーサーへと戻して凜の質問に答えた。

「確かに私の夢は小説家になることです。でもね凜ちゃん、私はその夢を持ったのは高校生に入ってからのことなんです。この学校に来てシズ君や凜ちゃんと出会い、一緒に過ごす私の毎日は薔薇色に輝いています。だから、私はこの幸せな日常がずっと続けば良いのに……と願わずにはいられないのです。そして、そんな感情から私は小説家になることを夢見ています。だから、私とシズ君が小説家になったところで、凜ちゃんが居なければ始まりません。なんてったって凜ちゃんは、私たちの最高の編集者ですからね。」

と、いたずらっぽく笑うのだった。これを聞いた凜は、目を真っ赤にして今にも泣きそうな声で叫ぶように、

「でも、小説家になるなんてチャンス、もう巡ってこないかもしれないですよ！ それなのに、それなのに翠ちゃんは私のことを考えてそのチャンスをどぶに捨てるなんて……そんな馬鹿なことしないで下さい！ 翠ちゃんは私のことなんか忘れて、自分の夢を追いかけて下さい！ 私は大丈夫ですから！」

と言いつつ。そんな凜を見た翠は、凜に近づいて、

「な、なんですか翠ちゃん！」

優しく抱きしめるのだった。

「凜ちゃん。私はですね、あの人が凜ちゃんのことを低く見ているのを感じてとても悔

しかつたんです。私の凜ちゃんはこの間に凄いなぞ！　と言つてやりたかつたです。そして、その思いはシズ君もきつとおんなじだつたと思います。だから、凜ちゃんも我慢しないで下さい。凜ちゃんは、いつも私の我が儘に付き合つてくれるんですから、たまには凜ちゃんも私に我が儘を言つて下さい。それじゃないと不公平じゃないですか」

と、優しく言つた翠。その言葉に耐えきれなくなつた凜は涙をぼろぼろと溢しながら、

「……私だつて、私だつて翠ちゃんともシズ先輩とももつといつしよに居たいです！　一人だけ仲間はずれなんて嫌です！　もつともつと翠ちゃんと遊びたいし、もつともつとシズ先輩の小説だつて読みたいです！　雑用として、編集者としてもつといつぱい二人の隣に居たいです！」

と、自分の思いの丈を僕たちにぶつけるのであつた。本当に僕たちは良い後輩を持つたんだな……。そして、そんな気持ちに気づいてやれずに、強い子だなんて思つていた自分を恥じた。言われてみれば当たり前のことだ。僕だつてまだまだ二人と一緒にこの日々を送つていたいと思つているんだ。僕たちが卒業したら、文芸部ではひとりぼっちになつてしまふ凜なら、なおさらのことだろう。

どうにか皆で一緒にこれからもずっと居られないかと、知恵を絞つて考えると、ある

一つのアイデアが思い浮かんだ。

「そうだ！ 僕たち三人で会社を作れば良いんだ！」

「会社……ですか？」

「なるほど、それは名案です！」

なんでこんなことに気づかなかつたんだろうか。これからもこうして過ごしていきたいんだったら、それを職業としてしまえばいいじゃないか！ 自分たちで作っちゃえばいいじゃないか！

天啓のようなひらめきを得た僕は、その興奮のままに、

「翠が執筆で、凜が編集と宣伝。そして僕が執筆兼営業。三人でも、そうすれば立派な会社だ！ 資本は自分の頭だから、多くのお金を用意するようもないし、翠の文章力と凜の宣伝力があればきつと飛ぶように売れるはず！ それに、三人だけだつたらお互いによく知り合つた仲だから、自分達のペースで色々することが出来るよ！」

「それはいいですね〜！ それなら三人一緒に居られますし、何より夢も叶います！」  
「どうやら翠も乗り気のようにだ。あとは凜の賛同を得れば決まりなんだが……」

「そうすれば……うん。私も、私もこの三人で会社を設立したいです！」

「よし、これで決まりだ！ では、ここに僕たち三人で出版社を設立することを宣言します！」

「はい！」

……ただの高校生の無謀な思いつきだと言われればそれまでだが、三人にとってそれは希望の光だった。

希望を信じてその道を突き進んだ彼らは、会社を設立した数年後には生論社なんか目につかないほどのトップ企業となる。僅か三人の社員で構成されるその企業は、発売する作品の全てをベストセラーにするという、まるで魔法のような偉業を成し遂げ続けている、と評判を呼んでいる。

ある雑誌が、そんなすさまじい功績を残せる理由はなんですか？ と聞いたところ、  
「弊社の社員はみんな、お互いがお互いを尊敬し合っているからです！」  
と、堂々と胸を張った、自信満々な解答が返ってきたそうだ。



大学生時代はミルクのように濃厚だった

思い出に耽る時間は、記憶に残る出来事の量に比例していると思う

ガタンゴトン

今、僕は列車に揺られている。窓の外を眺めれば、ビルが乱立する都会の人工的な風景から段々と、視界いっぱい広がる緑が美しい、自然豊かな風景へと移り変わっていくのが感じられる。雪解けもそろそろ終わり冬から春へと変わるこの季節、3月の麗らかな春の日差しはほかほかとシートに座っている僕のことを暖めてくれるのであった。

この列車の目的地は、木組みの家と石畳の街。今日僕は、およそ半年ぶりくらいに実家へと帰省するのだ。ただ帰省といっても、もう僕が高層ビルが建ち並んでいる都会へと戻ることはないだろう。

僕と翠が木組みの街を離れてから早4年。同じ大学の違う学部に進学した僕と翠は、4年前のあの日、ラビットハウスで交わした会社設立の誓いを成し遂げるために、大学

の合格が決まったときからあちらこちらで奮闘した。凜も手伝ってくれようとしたのだったが当時彼女は受験生だったので、気持ちだけ受け取って勉強に専念して貰うのだった。そうして、偶には後輩にも良いところみせなきゃと翠も僕も頑張った甲斐があり、凜が僕たちと同じ大学に入学してすぐに、無事会社を立ち上げることができたのだった。

……現在この列車の中には、翠も凜もいない。僕だけが一足先に帰省している。何故かという、二人ともまだ仕事が残っているからだ。その仕事というのは、うちの出版社から初めて出した翠の作品『うさぎになったバリスタ』を映画化しよう！ という高校生時代には夢にも思わなかった話についてだ。

『うさぎになったバリスタ』は毎年何十万部と売れるベストセラー小説として、3年前の発売に関わらず未だにその名を全国に轟かせている。そして、その人気っぷりに惹き付けられた数々の企業が、直接こちらにコラボや映画化の提案などをしてきたのだった。

それらの提案をされた当初、僕たちは大学に通いながら仕事を両立させている状態であり、サークルに入る余裕すらない程忙しかったので、この提案を受けてしまったら大卒に行くことさえままならないのではないかと感じ、その場ではそれらの提案を全てを

見送ることにした。

それでも先方は諦めきれなかったのか、いつでもいいので時間が出来たらこちらに教えて下さい。とありがたいことを言ってくれたので、翠が大学を卒業した後すぐに連絡して、映画化企画を立ち上げるのであった。

……ただし、今の話はい一週間前のことなので、いくら会社を立ち上げてから敏腕経営者として活躍している凜でも、企画を煮詰めるにはもうしばらくの時間が必要だろう。

そういえば、さつき大学を卒業して……と言ったが、実は僕、大学を中退してしまっている。これは学業不振や出席日数が足りない、といった理由ではなくやむにやまれぬ事情があつたのだ。

会社を立ち上げると決めた後、会社の代表は誰にするかという話になったのだが、それは凜が一番適任だろうという僕と翠の意見によつて、少し恥ずかしそうにしながらも、任せて下さい！ と凜も言ってくれたので、そのまま決定した。

その後、代表は凜に任せるとはいえ、僕も何か出来ないかと一人家でネットを見ながら考えていたところ、とあるサイトで、弁護士になれば行政書士・弁理士・税理士・社会保険労務士の登録もすることが出来る。と大変魅力的なことが書かれてあつたので、

これだ！ と思った僕は、弁護士を目指してその日から受験勉強そっちのけで司法試験の勉強を必死にするのであった。

……弁護士になるには法学部に入って、法科大学院に進まなければいけないと思われがちだが、その他にも司法試験予備試験というものに受かりその後司法試験に受かるという方法もあるのだ。大学院に行くほどにお金と時間の余裕のない僕は、己の頭の良さに感謝しながら死にものぐるいで大学に入ってからも勉強した。

結果として僕は大学2年生の5月に、無事司法試験に合格するのだった。

しかし、弁護士というのは司法試験に合格するだけではなれない。試験合格後1年かけて、法律実務に関する幅広い知識と実技を学ぶとともに、法律のプロフェッショナルとして必要な職業意識と倫理規範についての教育を受ける必要があるのだ。これを司法修習というのだが、この時全国各地に行かなければいけないので、どうしても大学を休まなければいけない。

休学するという手もあったのだが、それで大学を卒業するのが1年遅れてしまったのは元も子もないと思った僕は、家族や翠、凜に相談して大学を辞めることを決意した。

しかも、司法修習生は準国家公務員というくくられ方をするので、副業をすることが禁じられている。よって僕は会社を辞める必要があった。こつちが本業だ！ と叫びたい気分になったものだが、ここまで頑張った成果を水の泡にするのも癪だったので、

泣く泣く会社から一旦解雇されて1年間全国各地を飛び回る僕だった。

まあ、そこで頑張ったおかげで現在僕はうちの会社の経理や財務を一手に引き受けることができるようになったのだが、あの時は複雑な気分だったものだ。

ちなみに、もしも訴訟が起こったときでも弁護士を雇う必要なく、僕が弁護人となることができる。できれば一生縁のないものでありたいがな。

というわけで大学を辞めて弁護士となった僕だったが、別に弁護士として仕事をするために資格を取った訳ではないので、弁護士として名乗る資格を得たその日に翠と凜の元へと戻り、1年の間で大きく成長していた愛しの我が社に再入社するのであった。

こんな1年間会社を辞めていた僕だが、本業である小説家を辞めた訳ではない。むしろ、翠よりも本を出しているくらいだ。

といっても、翠より売れているわけではないが……。それでも、『うさぎになったバリスタ』のような化け物染みた記録には遠く及ばないとはいえ、世間からは高い評価を頂いている。ただし、僕が出した本の中で一番高い評価を得ているのは小説ではなく、面白半分て書いた参考書だ。

翠に続き僕も1冊小説を出した後のことだ、三人でホームパーティーでお祝いをして、いる時に軽い冗談で書いていた参考書を凜に見せたところ、

「条河先生……これ、出版しましょう！」

と、何か良い感じの反応をもらってしまったので、どうにも冗談と言いつけられないまま出版する流れとなってしまった。さつき冗談とか面白半分でとか言ったが、書いてある中身は間違いなく本当のことだから安心してほしい。

凜は会社で仕事をするようになった時から、仕事モードに入ると僕のことを条河先生、翠のことを青山先生と呼ぶようになった。でも時々素が出てしまうようで、社外の人がある前で翠ちゃんやシズ先輩と呼んでしまったことも何度かある。その時の慌てて赤面しながら訂正する凜の姿は、あまりに可愛らしくその後の交渉は、いつもより円滑に進むのだった。

その他に何か変わったことといえば、翠があまりふらふらと出かけなくなっただろうか。

高校生の頃はいつも凜と、学校全てを使った追いかけっこを繰り返していた翠だったが、大学に入ってからというものの何かと忙しい毎日だったのでそんな時間を取る暇なく、また凜は翠よりもっと忙しい日々を送っており、過労で倒れたこともあったくらいだったので、そんな凜に気を遣ってか二人が追いかけっこをする日々は終わりを告げたのだった。

今となつては思い出になるが、元気に働いていた凧が崩れるようにして床にぺたんと座り込んだときは本当に焦った。凧は大丈夫だと明るく振る舞っていたが、青白くいかにも具合悪いといった顔をしていたのですぐ病院へ連れて行くと、過労という診断が下された。

大学に行きながら、編集者として僕たちの作品を読み、さらには代表社員として暇を見つけては色々なところへ出向き宣伝活動を行うという八面六臂の活躍を見せていた凧の体には、その小柄な身に合わない重圧が押しかかっていた。

それに気づかず凧に頑張らせすぎてしまっていた僕たちは、凧にしばらくお休みをあげようということで見解が一致し、丁度夏期休業に入ることもあつて凧には1ヶ月間実家でゆっくりしてもらうのだった。

この時、翠と僕は4年生で、既に僕は学校を辞めていたこともあり、凧が受け持っていた仕事を全部引き受けたのだが、あまりの激務に、凧はこんなに大変な思いをしながら僕たちを支えてくれていたんだ、という尊敬の念と、倒れるまで仕事をやらせてしまったことに対しての申し訳ない気持ちかわき上がるのであった。

1ヶ月後、会社へと戻つてきた凧は何か決意した表情をしていた。気になつて聞いてみたところ、思いがけない答えが返つてきた。

「私、大学辞めてこの会社に専念することに決めました」

何ということだろうか。動揺しながらも詳しく話を聞いてみると、どうやら1ヶ月の休暇の間に親と話し合って、学業が仕事に支障をきたすようならいつそのこと大学を辞めてしまえばいいという結論に落ち着いたらしい。

いくら何でも仕事が忙しいからって、大学を辞めることはないだろうと言ってみる僕だったが、

「それでも私、3年生なんですよ？ 先輩より最終学歴上なんですからー！」

と返されてしまい、ぐうの音もでないのだった。確かに僕は2年生の10月に辞めているから、一つ下の凜に学歴の上では負けてしまっている。それに気づいて内心落ち込んでいると、

「だから、心配しなくて大丈夫です！ もう私だって成人したんですから、自分のことは自分で責任持ちますので！」

……これは僕の完敗だな。いや、そもそも凜が決意した時点で勝負にすらなっていない。

一つ下の後輩だと思っていた少女は、いつの間にか僕を追い抜かして成長していたようです。

ああ、まったく凜は凄いや。そう思わざるを得ない日でした。

こうして、僕たちは時に笑い、時に泣き、偶に失敗もあつたけれど、木組みの街を離



れて4年間、三人で支え合いながらやってきたのだった。

思い出に浸っていると、いつの間にか窓の外は、懐かしい幻想的な街の風景へと変わっていた。

「まもなく終点です。どなた様もお忘れ物がないようにお気を付け下さい」

車内に流れるアナウンスは、長いようで短かった列車旅の終わりを告げる。

家に帰ったら、まずはマヤにお土産を渡そうかな？　なんて考えながら列車を降りた僕は、軽い足取りで木組みの街の中を、ゆっくりと歩いていくのだった。

「これからまたよろしくな、木組みの街」

大人になっても、子供の頃の純粋な心を持ち続けたいものだね

人は人に愛された分だけ人を愛することが出来る。これって素晴らしい永久機関だよ

ここは、木組みの街にいくつかある中学校の内の一つ。

大掃除と終業式の2時間だけで終わることになっている今日この日。明日からは春休みのため、学校全体が浮かれた気分になっている。その中でも、特に嬉しそうにしている1年生の生徒が一人……

「ふんふんふん♪」

床にモップをかけながら楽しげに鼻歌を唄っている、濃紺色の髪をしたこの少女の名は、条河麻耶。基本皆からは、マヤと呼ばれている。

「マヤさん、今日はなんだか楽しそうですね？」

マヤの方へと近づきながらそう尋ねる、銀髪とも薄い青色ともいえない何とも不思議

な色をした髪をしている少女は香風智乃。

実家はラビットハウスというコーヒーをメインにした喫茶店で、彼女自身の将来の夢は立派なバリスタという、家思いの子だ。家族や親しい友人からはチノと呼ばれている。

「なんてったって、明日からは春休みだし！　いっぱい遊べるからね！」

ふんふふんとそのままご機嫌に掃除を続けるマヤ。だが、そのあまりに浮かれすぎている様子に疑問を覚えたチノは、

「その表情から見るに、なんだかそれだけじゃないような気がします……」

と、マヤへと問いかけた。

チノのその言葉を聞いたマヤは、ギクリと目に見えて分かるぐらい動揺しながら、

「そ、そんなことないってば〜！」

と、手を横にぶんぶんと振って必死になって否定するのであった。

そんなマヤの様子を怪しいと思ったチノは、更に問い詰めようとして口を開こうとしたが、その直前に、

「ふふつ、マヤちゃんの家だね、今日お兄さんが帰ってくるんだよ。だから、それがとつても嬉しいから見て分かるくらい浮かれてるんじゃないかな〜？」

と、二人の後ろから現れた、例えるなら苺のように赤い髪をした少女、奈津恵、通称

メグが答えを言った。

「ちよ、メグ！ それを言うなよー！」

恥ずかしそうにメグをぼかぼかと叩くマヤ。

「マヤちゃん痛いよ〜」

そんなマヤが可笑しいのか、メグは笑いながらマヤに言う。マヤは悪びれた様子のないメグを見て、さらにほっぺをぶくーつと膨らませた。

そんな二人のやりとりを見ていたチノは、

「マヤさんってお兄さん居たんですね。ですが、その、帰ってくるというのはなんですか？」

マヤに向かって話しかける。それに対してマヤは、まだ恥ずかしいのかちよつと拗ねたような口調で、

「遠くの大学に行くためにしてしばらく離れてただけで、やつと一段落したからって言うって、今日帰ってくるんだ」

と、チノに答える。そのマヤの言葉に続けてメグが、

「マヤちゃんのお兄さんって、あの『コーヒーから学ぶ数学』の作者さんでもあるんだよ〜」

とチノに補足説明をする。この告白を聞いたチノというと、

「え！ あの、おもしろくてわかりやすいと評判の参考書をですか！ す、すごいです。尊敬します！」

目をキラキラと輝かせて称賛するのであった。

『コーヒーから学ぶ数学』というのは、マヤの兄、条河静が元々冗談で書いたものだったが、あれよあれよという間に発売されてしまい、いつの間にか中・高生向けの参考書の中ではトップクラスに売れる大人気参考書となった。

物語の舞台はとある喫茶店で、日常の中で何気なく使われているものを数学的に見てもみようというコンセプトの元、喫茶店でアルバイトをする少女が、お客さんに見立てた読者に向かって問いかけるという内容になっている。

まるで自分が物語の一部になったように感じられると評判なその本は、中学生や高校生向けに書かれているにも関わらず、大人からも高い評価を得ているようだ。

世間一般からだけでなく、自分の友達からも兄のことを褒められたマヤは、

「ふっふーん！ 私の兄貴は、小説を書くのもすごいし、それにかっこいいし優しいんだよー！」

と、自分が褒められたかのように嬉しそうな顔をしてそう言った。

その言葉を聞き、マヤが心からの笑顔をしているのを見たチノとメグは、お互いに顔を見合わせると、まるで計ったかのようなタイミングで、

「マヤさん（ちゃん）は、本当にお兄さんのことが大好きなんですね（なんだね〜）」  
と言うのだった。

「なっ!!」

想像もしていなかった返答に、口をパクパクとさせながら言葉にならない声を出すマヤ。自分はそんなに兄が好きかと、己の過去の言動を振り返ってみると、思い当たる節がいくつも見つかったようで耳まで顔を真っ赤にするのだった。

「あゝ、照れてる〜」

「こんなマヤさんを見るのは珍しいです」

普段のお返しとばかりに、全力でからかいかいに行くチノとメグ。自覚があるばかりに何も言い返せないマヤは、うくと唸りながら可愛らしく二人のことを睨んでいる。

チノ、マヤ、メグの三人が繰り広げるこの微笑ましいやりとりは、この後掃除しなさいと先生に注意されるまで続くのであった。

学校の帰り道、

「もう、チノとメグのせいで怒られたじゃん」

「あれは、マヤさんが急にいつも見せない顔を見せたのがいけないんです」

掃除の時間中、先生に注意された原因をお互いのせいにしてふざけ合っている

ると、

「ねえマヤちゃん、今度チノちゃんと一緒にマヤちゃんのお兄さんに会いに行ってもいい？」

と、メグがマヤにお願いをするのだった。これに対してマヤは、

「うん、いいよ！ それだったらせつかくだし春休みの宿題を兄貴に見てもらおうよ！」と提案するのであった。

人見知りな性格であるチノは、他人に勉強を教えることなんて普段だったら絶対に断るのだが、教えて貰う相手が友達で、しかも一方的にだがよく知った人であるということもあってか好奇心の方が勝ったようで、

「是非お願いします！」

即答するのだった。しかし、それでもまだ怖い気持ちはあるようで、

「それと……勉強をするのでしたら、ラビットハウスで行うのはどうでしょうか……？」と、自分のよく知った場所を勉強会の会場として提案するのであった。

断られてしまうのではないかと少し不安になりながらマヤとメグの返答を待つチノだったが、その二人はすぐに、

「いいね！それ！」

「よし、じゃあ決まりだな！」

と快く了承して、場所が決定した。その言葉にほっとしたチノは、帰ったらおじいちゃんに了解をもらわないとな、と考えるのであった。

「でも、私たちが二テーブル占領しちゃっていいの?」

「……いいんです。どうせお客さんも少ないですから……」

女三人寄れば姦しいとはよく言ったものだが、三人寄れば文殊の知恵とも言う。この後も別々の道に分かれるまでの間、彼女たちはいつ勉強会を実施するかといった話から、昨日のテレビが面白かったことという話まで、三人全員が心の底から楽しんでいるのであった。

所変わってラビットハウスにて、

「くというわけなんです、ラビットハウスを使ってもいいですか?」

「ああ、いいぞ」

チノと、もふもふした一見何か分からない生物、少し動物に詳しい人ならそれがアンゴラウサギという種の兎だと分かるだろう、が話をしていた。

「しかし、『コーヒーで学ぶ数学』とは、そいつは中々いい目をしておるな。来たら一杯コーヒーをサービスしてやろうじゃないか」



「そうやっておじいちゃんはずぐサービスって言ってコーヒーを出しちゃうんですから……それだから儲からなかったんじゃないですか？」

おじいちゃんと呼ばれたその兎、ティツピーという名前なのだが、それはうぐつと言つて言葉に詰まった。

「そ、それでも昔も、このコーヒ―は美味しいと言つて何回も来てくれる客も多かったんじゃないぞ！ 特にあの高校生だった坊主と嬢ちゃん、静と青山だったか、は毎日のように訪れていたもんじゃない！」

「そんなお客さんも来なくなつてしまつたんですね……」

「そ、そんなことないぞ、あいつらは確か大学に行くためにこの街を離れているだけであつて、戻つてきたらまた来てくれるはずじゃよ！」

孫の容赦ない責めに次第にたじたじになつていくティツピー。孫の言うことが全て事実であるばかりに、あまり強く出ることができないのであつた。

そして、最後に言つた言葉は、

「早くあの騒がしい高校生三人組が帰つてこないかのう〜」

と言うものだった。

木組みの街は今日も平和な日常が紡がれていく……

60 人は人に愛された分だけ人を愛することが出来る。これって素晴らしい永久機関だ

知らないうちに人も街もどんどん変わっていく。でも、  
変わっても変わらないものだってあるんだよ

木組みの街へと帰ってきた次の日、僕は久々の故郷を満喫しようと思い、朝早くからぶらりと散歩に出たのであった。

「この街もずいぶん変わったなあ〜」

時刻はまだ朝の7時。まだ開いている店は数店舗しかなく、通りを歩いている人も少ない。これが何日か前だったならば、学校から離れたところに住んでいる学生が通学する姿がちらほらと見られたのだろうが、あいにく今は春休み。きつと普段から頑張っている学生達は、日々たまった疲れを癒やすためにまだぐっすりと寝ていることだろう。そう、うちのマヤのように……。

昨日、列車に乗ってこの街へと帰ってきた僕は、童話の中に入ってしまったような街並みの中を、お土産や貴重品などが入ったスーツケースをガラガラと引きながら、早く家族、特にマヤに会いたい一心でまっすぐ家に帰った。ちなみに、日課の連絡でこのことを翠と凜に言ったら、シスコンお兄ちゃんとからかわれてしまった……。自覚はして

いるので許してほしい……。

それで、家に着いた僕は、なくさないようにと上着の内ポケットに入れていた実家の鍵を取り出して扉を開けようとしたのだが、鍵を差し込もうとした瞬間、急に内側から扉が開いた。

「兄貴、お帰りなさい！　つて、大丈夫!？」

勢いよく開いた扉は鍵を開けようと一歩前に出ていた僕の体を直撃した。丁度取っ手の所がみぞおちに入ってしまった、そのあまりの痛さに悶絶しながらも、僕は心配そうにこちらを見ているマヤに向かって、

「たっ、ただいま」

と言った。しかしそれだけ告げると、僕は我慢をしきれずにお腹を押さえてうずくまってしまうのだった。慌ててこちらに駆け寄ってくるマヤの姿を見た僕は、ああ、最初っから締まらないなあ、と自分のあまりに見苦しい状態に向けて自嘲するのであった。

……それから数分たつてようやく立ち上がるようになった僕は、ずっと玄関の前で僕のことをおろおろとしながら待っていてくれたマヤに、

「よし、もう大丈夫だよ」

「本当?」

「ああ、ありがとなマヤ。それと、ただいま」

お礼と改めてただいまを言うのだった。そして、それを聞いたマヤは僕に向かって、花の咲くような笑顔を見せながら、

「おかえり！ シズにい！」

と、言ってくれたのだった。……僕がここを離れて以来、僕のことを兄貴としか呼ばなかったマヤが、シズにいとよつてくれるなんて珍しい。思わず懐かしい気分になりながら、そのことをマヤに指摘すると、

「今日だけは特別なのっ！」

と、僕に抱きついてきた。中学生になってもまだまだ甘えん坊だななんて思いながら、僕の胸に顔をうずくめているマヤの頭を撫でてやると、マヤはえへへと言つて、顔が見えなくても分かるぐらいに幸せそうにするのだった。

しばらくの間そうして頭を撫でていた僕だったが、このままでは何も出来ないの、名残惜しいがマヤの頭を撫でる手を止め、いまだ抱きついているマヤを引き離れた。そして荷物を中へと入れようと、隣に転がっているスーツケースを手取るのだった。

……ここまでが玄関先、家の中ではなく外での話である。

この後、マヤに買ってきたお土産を渡し、先に送つておいた衣類や生活用品の片付けも終わってほっと一息ついていると、

「シズにいい、一緒にゲームしよう!」

と、マヤから呼ばれた。手には僕が大学に行く前にも一緒にやった、あのゲームが握られている。もう既にレトロゲーの域に達しているであろうそのゲームだが、マヤにとっては一番のお気に入りらしく、長期休暇の際に帰省した時には毎回一緒にやっていた。

……帰省しても仕事や弁護士になるための勉強で中々時間がとれなかった僕がマヤと二人で遊んだそのゲームは、きつとマヤにとっては大切な品なんだろうと思うのは自意識過剰かな?

「よし! 今日からはしばらく何も無いからいっぱい遊ぶぞ、マヤ!」

「そうこなくっちゃ!」

こうしてマヤと数時間にわたるゲーム対決が幕を開けたのだが、結果は惨敗。新しくマヤが買ったらしいゲームは勿論、昔やっていたゲームですらボロ負け。唯一勝てたのは運が絡んでくるゲームだけという何とも情けない結果に終わったのだった。それでも、マヤが終始笑顔で楽しそうに遊んでくれていたからよしとするか。

「は、今日は疲れたな」

風呂に入って自室へと戻ってきた僕。早いけど今日はもう寝るかと思いい布団に入る

と、足の方に何やらもそもそと蠢く物体があることに気づく。何が居るのかは大体予想が付いたので、ガバツと勢いよく布団を捲りあげると、そこには予想通り既に寝る準備が整っているパジャマ姿のマヤが居た。

「マヤ、一応聞くんだけれど、ここで何してるんだ？」

「せつかくだし、今日はシズにいとことん甘えてやろうと思つてね！」

そう言つて、にししつと笑うマヤ。もう、しようがないなあ。知り合いからよく妹には甘々だねと言われる僕は、隣にやつてきたマヤと夜遅くまで色々なことを話す幸せな一時を過ごした。そしてマヤが話し疲れて眠った後、もう聞かえていないだろうが、マヤにおやすみと言つて僕も夢の中へと旅立つのだった。

チュンチュン

……鳥のさえずりに起こされ、眠い目を擦りながら枕元の時計を確認するとまだ朝の6時。普段だったらもう少し寝ているのだが、窓を開けて日が昇つてきたのを見た僕は、せつかく早起きしたんだから朝の散歩に出かけるのも悪くないなと思ひ、隣でまだぐつすりと眠っているマヤを起こさないように、そつと布団から出るのだった。

こうして散歩に出ている訳だが、朝食も食べずに出てきてしまったのでそろそろお腹

が空いてきた。

どこかにこんな朝早くにやっている店はなかったかと、古い記憶を辿りながらぶらぶらと歩いていると、少し先の方にあるお店の前に人が何人か並んでいるのが見えた。

一体何だろうと思つて近づいてみると、そこには出来たてほかほかのパンを売っているパン屋さんがあつた。

「あれ？ 昔古本屋だったのに潰れちゃったんだ」

これでも文芸部に所属していて、現在小説家として仕事しているぐらいなので昔から本は好きだった。だから、ここにあつた古本屋にはだいぶお世話になつたのだが、この4年の間になくなつていたらしい。

この街も変わっていないようで変わっているんだなあと一抹の寂しさを覚えながら、変わつてしまったものは仕方がないので丁度良かったと思うことにして、お腹を満たすためにパン屋へと続く列に並ぶのだった。

朝食を摂つた僕は、さすが外まで並んでいるだけあつて美味しいなど、またこのパン屋さんへ寄ることを心に決め、あてのない散歩を再開した。

現在時刻は7時半ちよつと前。今日、唯一の目的であるラビットハウスへ行くにはまだ早い。

さて、これからどうしようかと歩きながら考えていると、ふと新しい小説のアイデア



が浮かんできて、これは忘れない内にメモしておかなければと近くにあったベンチに座って、最近買ったスマートフォンにポチポチと打ち込むのであった。

「ん〜！ 流石に肩がこつたな〜」

大きくのびをして、そう独り言を呟く。慣れないタッチパネル式の文字に戸惑っている内に、いつの間にかかなり時間が経っており、既に時刻は10時過ぎ。これはやり過ぎたなど反省しながら、僕はラビットハウスへの道を歩き始めたのであった。

しばらくどころか、もう4年も行っていないラビットハウス。最後に行つたのは確か高校を卒業した日、凜も同じ大学を志望しているとはいえ、1年間離れてしまうのは間違いないので文芸部最後の思い出として行こうということになって以来一度も訪れなかった。

本当は休暇中に帰省したときには行こうと考えていたのだが、当時はあまりにも忙しくてラビットハウスに行く余裕がなかったのだ。だから今日ようやく行けるのを心の底から楽しみにしていた。

ラビットハウスで皆でわいわいやっていたときのことを思い出し、懐かしい気持ちに浸っていると、兎がコーヒーカップを持っている、あの独特の看板が見えてきた。

久しぶりだったけどマスターは元気かなと思いつつながら、入り口の扉を開けた。

「いらっしゃいませ」

相変わらずお客さんの少ない落ち着いた雰囲気の店内。またマスターがいつもの声で迎えてくれるはずだと思つて入つたのだが、聞こえてきたのは鈴の音色のように透き通つた声だつた。

そのマスターとは違つたタイプだが、同じように心を落ち着かせるその声を発したのはカウンターの向こうにいる少女だつた。

「あの、お客さん?」

「あ、ごめんね。オリジナルブレンド一つで」

まだマヤとたいして変わらないであろう少女が働いていることに驚き、呆然と立ち尽くしてしまつた。しかも頭に昔、ここで飼つていたアンゴラウサギを乗せていた。その少女は、僕の注文を受けると慣れた手つきで豆を挽き、サイフォンでコーヒーを淹れてくれた。

「どうぞ?」

コトンと、少女の目の前に座つていた僕に一杯のコーヒーが差し出される。ありがとうと一言お礼を言つてカップに口を付けると、口の中には調和のとれたコクのある、マスターが淹れるのと遜色ない味が広がつた。

カップを口から離しほつと一息つくくと、僕はその少女に気になつていたことを聞いてみた。

「ところで、このマスターさんはお留守かな？ それと君は……？」

「私はチノです。このマスターの孫です」

そうか、あのマスターのお孫さんだったのか。どうりでこんなに落ち着いた雰囲気醸し出していたんだな。そう一人で納得していると、その少女、チノちゃんは続けて、

「……祖父は去年亡くなつてしまいました」

……一瞬思考が固まつてしまった。そうか、マスターは亡くなつてしまったのか……。生きとし生けるものは皆死んでしまうのが自然の摂理なんだとは分かっているが、一言お別れぐらい言わせてくれたって良かったのに……！

いや、それは僕が悪いんだ。もつと前にここに来ていれば、もつとマスターとお話していれば！ そうしたら、葬式にだつて行けたかもしれないのに……。

心が張り裂けそうなほど悲しくなった僕は、気がつけば目から涙が零れていた。

「あ、あの、お客さん大丈夫ですか!？」

僕が突然泣き出してしまったことに慌てふためくチノちゃん。悪いことをしてしまつたなと思い、袖で涙を拭つて、

「大丈夫だよ」

と、笑いかけるのだった。それでもチノちゃんはなお心配そうにしているので、少しだけ昔話をすることにした。

「……昔、といっても4年位前のことなんだけどね、当時高校生だった僕はこの喫茶店が好きで、よく来てたんだ。一人で来るときもあつたけど、部活の皆と一緒に来たりもしてね。それで、マスターにはいつもお世話になってたから、知らない間に亡くなっていたって知ってちよつと寂しくなったんだ。大人なのに人前でぼろぼろ泣いちやうなんて、笑つちやうよね」

やや自嘲気味にそう言った僕。チノちゃんは急に語り出したことに驚いているのか、目を見開いている。ちよつと恥ずかしくなってきたので、アンゴラウサギ、そうだティツピーっていう名前だったな、の方を見てみると、驚いたことに泣き出している。

そういえば『うさぎになったバリスタ』では、マスターは兎になっていたな。そんなことをふと思い出して、無駄とは分かっているながらもティツピーに向かって、

「もう、そんなに泣いちやうてどうしたんですか。マスター」

と、呼びかけてしまった。場を紛らわす冗談にしては、ちよつと分かりづらかったかなと思つたので、冗談だよと言おうとすると、ティツピーとチノちゃんが驚きながら、「なんで、分かつたんじゃない！（ですか！）」

と言ってきた。え？ 兎が喋つた？

「相変わらずお前さんは感の鋭いのう〜」

しかしこの渋い声といい、この言い方といい、これではまるでマスターのような……。

まさか、本当にマスターが兎に化けているというのか？

「それにしてもシズ。久しぶりじゃの。」

「マスター？ ほ、本当にマスターなんですか？」

「ああ、何故か、亡くなつた後に人格がティツピーに乗り移つてしまつたようなんじゃないよ」

……… 事實は小説より奇なり。まさかこんな事が現実で起きてしまうとはな。でも、またマスターに会えて良かった……。

「マスター………ただいま帰りました」

「ああ、お帰り」

優しい声でマスターは僕に言つてくれたのだつた。

その後、マスターと僕はラビットハウスがバータイムになるまでの間、積みもりに積もつた話を長々と話すのだつた……。

カランカラン

シズが帰つた後の店内。チノとティツピーは彼について話をしていた。

「おじいちゃん、あの人が昨日言つていたシズさんなんですか？」

「ああ、それにしてもあやつも青山も立派な小説家になつたもんじゃなあ……。まさか『コーヒーで学ぶ数学』を書いたのがあの小僧だつたなんて」

「えっ、それじゃあ、あの人ってマヤさんのお兄さんだったんですか！ ど、どうしましよう。私ちゃんと接客できていたでしょうか」

少々狼狽えているチノ。それを見たティツピーは、笑って、

「大丈夫じゃよ、あやつはチノのことを褒めておったぞ。まだ中学生なのに偉いなど」「そ、そうですか。ほっとしました」

そう言つて胸をなで下ろすチノ。マヤさんの言つたとおり、優しい人だったなど、心がちよつとほかほかしながらラビットハウスの片付けをするのであった。

これから先もシズはラビットハウスに通い続けるだろう。

ラビットハウスは高校生の時とは変わってしまったている。でもそこには変わらない美味しさと、姿が変わってしまったても暖かい人、それに祖父のことを敬愛しながら働く、心優しい少女がいる。

だから、通い続けるのだ。

妹だつて立派に成長しているんだと氣付かされました

僕が木組みの街へ歸つてきて2日目のこと。その日、僕は朝早くから自室の押し入れをひっくり返して、あるものを探していた。

「あれ、おかしいな。確かこの辺に置いていたはずなんだけどな？」

探している物は、僕が中学生時代に使っていた教科書やノート、問題集だ。確か中学を卒業したときに、マヤが中学生になったら僕が勉強を教えるために使うかもしれないからと、束ねて押し入れの奥に置いていたはずなんだが……。

「お、あつたあつた」

よかつた、まだ処分していなかつたようだ。押し入れの奥の奥、よく見ないと見つからないその場所にあつた本の束を取り出した僕は、見つかつたことに安堵したのであつた。

なぜ僕がこれを探していたかというと、それは昨日のことだ……。

昨日、ラビットハウスで兎になつてしまつたマスターと、つつい話に夢中になつてしまい、家に着いたのはもう日が沈んだ後だつた。

朝から実に10時間以上散歩に出ていて、少し疲れたけれど、充実した1日だつたな

と思いつながら玄関に入ると、目の前にマヤが仁王立ちしていた。

「うおっ！」

まさか、玄関を開けたら人がいるなんて思ってたので、思わず驚いて声をあげてしまった。

なぜ、こんなところで仁王立ちしているのかと聞こうとしたが、それより先にマヤが話し始めた。

「む、兄貴つたらどこに行ってたのさー！」

そう言っつて頬を膨らませている。その瞬間、マヤの姿が凜に重なった。

はは、これじゃあまるで僕が翠じゃないか……。しかも、締め切りが近いのにも関わらず、まだ一文字も書いてなくて、それでいてまだアイデア探しという名の追いかけてを楽しんでるような、結構どうしようもない、そんな感じの。

そんな二人を連想してしまったので、マヤに大変申し訳ない気持ちが生まれた。

「えつと、昔行つてた喫茶店にちよつとな」

「ちよつとつて……。もう夜だよ！ 私が朝起きたときにはもう居なかったのに、ちよつとも何もないでしょ！」

……返す言葉もございません。いや、でも自分の中ではあつという間だったのは間違いないかったです。



そう心の中で言い訳していると、

「もう！　いつまでたつても帰つてこないから心配になつて何回も電話したのに、1回も出ないから本当になにかあつたんじやないかって思つたんだよ！」

その言葉を聞き慌てて携帯を開いてみると、何件もの不在着信が届いているのがすぐに分かつた。

しかし、最初に連絡をくれたのが11時過ぎと、運悪く僕が携帯を使い終わった直後であり、それ以降携帯を開いていなかったもので、全く知らなかつたのだ。

それに、どうやら僕は携帯をマナーモードに設定していたらしく、電話を着信しても鳴らなかつたんだそう。

なんでマナーモードなんかに、と思つたがよく思い出してみれば、そういえばここに帰つてくるとき、列車に乗るからマナーモードに設定していたのだった。すっかり忘れていた。

これは本当に悪いことをしたとマヤに謝ると、マヤは、  
「はあく、もういいよ。でも、本当に心配したんだからね！」

と、この後数分間怒られてしまった。これじゃあどつちが年上だか分からないなど思いつながら、マヤの説教をありがたく聞くのだった。

「本当に兄貴は……。罰として、今度私に何か奢つてよ！」

そう言って、いたずらっぽく笑みを浮かべたマヤ。僕が全て悪いのだが、許してくれたようにによりだ。そして僕は、今日の事は心の底から反省したのだった。

夜ご飯を食べて、お風呂にも入った後、僕とマヤは居間でゆつくりとしていた。すると、ふいにマヤが質問してきた。

「そういえば喫茶店といえば、兄貴は来週の月曜日って空いてる？」

「来週の月曜日だから明々後日か。その日は、というかマヤの春休みが終わるくらいまでは何もすることがないからいつでも暇だよ」

翠と凜はしばらく映画化企画で忙しいだろうから、その間僕は次に出す本のネタ集めだけしかやることがない。少なくとも4月の初めまではのんびりと過ごせるだろう。

「それじゃあ兄貴、私に心配をかけた罰をもう一つ。来週の月曜日は、私たちに勉強を教えること！」

「私たちって、マヤの他に誰が居るんだ？」

「二人はメグだよ。兄貴も知ってるでしょ？ それで、もう一人はねチノっていう名前の、中学生になってから出来た友達！」

チノって、もしかして今日ラビットハウスで会ったあのマスターのお孫さんかな？ 丁度年齢もマヤと同じぐらいだったし。

「それでね、チノの家はラビットハウスっていう喫茶店をやっているんだけどね、そこで勉強会をやるうって話になったんだ！」

間違いない、あの娘だ。……いやはや、世間って狭いもんだな。この木組みの街だつて田舎の方にあるとはいえ人口は何万人といるし、土地だつてそこそこ広いはずなんだがな。

「それで、そのチノつてのがさ、クールなんだけど寂しがりやなんだよな。その日に紹介するよ！」

「いや、紹介しなくても大丈夫だ。その娘とは、今日ラビットハウスで会つて……。」  
これにはマヤもさすがに驚いたようで、目をまんまるに見開いている。

「ええっ！ 兄貴が今日行つた喫茶店つて、ラビットハウスのことだつたんだく！  
えー、私だつて1回も行ったことないのにずるいぞく」

「ずるいと言われても、高校生の頃からお世話になつてた所だからな」

帰つてきたらまず行きたかつた所になるくらいは好きな場所だ。

「まあ、ずるいって言うのは冗談にしても、まさかチノに会つていたとは……本当にびっくりだよ」

僕の方こそ、今日会つた少女がピンポイントでマヤの友達、それもマヤはあまり多くの友達を作らないから大変仲の良い、だつたなんて驚きだよ。

「じゃあ兄貴、明々後日の10時からラビットハウスで春休みの宿題を終わらせるための勉強会だから、よろしくね！」

「わかったよ。でも、教えるにしても何やるのか僕は知らないから、冬休みの宿題を明日まで貸しておいてくれないかな？」

「おっけー！ 取ってくるからちよつと待っててー！」

そう言つて自分の部屋へと行くマヤだった。

「はい、これで全部だよー！」

……マヤが持つてきた宿題の量を見た僕は啞然とした。そこにあつたのは、文字通りの宿題の山だった。しかも、国語、数学、理科、社会、英語がこれまでに中学校で習つた内容からまんべんなく出ていて、これを全部解かなきゃいけないのかと、自分がやるのではないにも関わらずもはや疲れた気分になつてきた。

「あ、ああ、ありがとう。明日までちよつと借りるな」

「はーいー！」

腕いっぱいを持った宿題を抱え、自室に戻つた僕。パラパラと全ての宿題を眺めてみると、所々に分からない問題がまじつていた。

ああ、これはちゃんと確認しておかないとな、と思う僕であつたが宿題の量に圧倒さ

れてしまい、もう今日は寝て明日の自分に託そうと、布団を被るのであった。

こうして、昨日の僕は無責任に寝てしまったので、今日の僕はまず自分が中学生の時にどのような習い、覚えたのか確認するために、さつきまで教科書やノートの束を探していたのだ。

よしっ！ さあ、これでも参考書を書いていたりするので、期待に応えられるように頑張りますか！

そう思つて久々の勉強を始めた僕だったが、分からなかつた問題は全て、自分が習つた時から改正されていたからだということに気づくのは、もう少し後の事だった。

「それにしても、マヤったら罰として勉強を教えること、なんて言つていたけど、勉強会をするメンバーを決めていたつてことは、最初から計画してたんだろな……」

わざわざ理由をつけて僕を参加させたのは、僕が逃げないようにするためか、それとも気恥ずかしさや遠慮からくる気持ちのせいなのか……、もしも後者だとすれば、何も遠慮なんてすることないのになと思つた僕であった。

みんなで勉強した後に一人で勉強すると、凄く寂しい気分になってくるよね

ピピピピ　ピピピピ　ポチッ

枕元で鳴るスマホに手を伸ばして、アラームの音を止める。窓の方を見てみると、まぶしい朝日が部屋の中を明るく照らしていた。その太陽の高さから、今は大体6時半くらいだろうと見当をつけて止めたアラームを見てみると、デジタルの文字は6：31と出ていた。

あー、惜しいと一瞬思ったが、アラームを設定した時刻が6時半だったことを思い出すと、何を当たり前の事を言っているんだと、少々恥ずかしい気持ちになった。

「さて、起きますかー！」

そんな恥ずかしさを振り払うようにして独り言を呟いた僕は、身体を布団から起こして大きく伸びをし、早く朝ご飯を食べてしまおうと、居間へ向かうのであった。

今日はラビットハウスでの勉強会だから、朝はしっかり食べないといけないなと思いつつながら、朝ご飯の献立をどうするか悩んでいると、誰かが起きたのかトントンと足音が

聞こえた。その音の軽さから、きつと、マヤが起きたんだろうなと推測していると、居間の扉が開いて、

「ふわあく、おはようシズにい……」

大きなあくびとともにこちらにやってきたマヤ。シズにいと呼んでいることから、まだ半分夢の中にいるんだろう。

後でこれを指摘すると、きつとマヤは顔を真つ赤にして恥ずかしがるんだろうな。ちよつと見てみたい気もするが、その後が怖いのでやめておくとしよう。

「おはようマヤ。朝ご飯は何がいい？」

「ん〜？　じゃあシズにいのそばめしー」

そばめしか、そういうえば昔はよく夜食や小腹が空いた時のおやつとして作ってたっけな。

そして作るとほぼ必ずマヤが、ひとくちちようだい！　つてやってきたんだよな。まあ、ひとくちと言いながらも半人前くらい食べてたが……。

でも、おいしいって言つて食べていたマヤは大変可愛らしかった。

「そばめしな。分かった、今作るよ」

冷蔵庫の中を確認すると、材料、といつても焼きそばとご飯さえあればそれなりに形にはなるのだが、一通り揃っていたので、昔のことを思い出しながらそばめしを作るこ

とにした。

そばめしというのは、基本的にはソース焼きそばとご飯を一緒に炒めるだけの料理なので、簡単に作ることができる。

10分程あればすぐに完成するので、そばめしが好きな僕は、司法修習で各地に行っていた時にもよく作って食べていたもんだ。

焼きそばをおかずにしてご飯を食べるこの炭水化物の重ね食べは、頭を動かすためのブドウ糖を多く得る手段としては適しているはずだ、と自分に言い聞かせることにして、食事バランスの悪さを見てみぬふりしていたのを鮮明におぼえている。

当時は毎日毎日、死ぬほど忙しい日々を送っていたので、こんな食事でも大丈夫だったが、今あの時と同じような頻度でそばめしを作っていたら、すぐに肥満になることだろう。

そう考えると僕もそろそろ健康に気を遣い始めないといけないなと思い、憂鬱な気分になるのであった。

そうこうしているうちに、焼きそばとご飯がいい具合に混ざりあってきた。火を止めて、用意した皿に移してあげれば、ほら完成だ。

「マヤー、できたぞーって、寝てるな」

待っている間に眠くなってしまうのか、絨毯の上で丸くなって二度寝しているマ



ヤ。気持ち良さそうに寝ているところ申し訳ないが、そばめしもできたことだし起こさせてもらうとしよう。今日は用事もあるしな。

「おーいマヤ！ 起きろー！」

その声にもぞもぞと身体を動かすマヤであったが、まだ起きるにはいたらなかったのか、そのまま動きを止めてしまう。

仕方ないので、今度は別の方法でと再度声をかけた。

「今日はラビットハウスで勉強会だろー！ 早く起きないと遅れるぞー！」

さすがにその言葉は効いたらしく、慌ててがばつと起き上がった。

「今、何時?!」

「まだ朝の7時過ぎだから慌てることはないぞ」

「あく、びつくりした〜」

そう言つて、ほつと胸をなでおろすマヤ。きつと遅れるという言葉聞いて、遅刻寸前だと思つたんだろう。自分もそうやって起こされたことは多々あるが、本当に心臓に悪い話だ。やつて何だが、少し申し訳ない気持ちになった。

「ほら、そばめしできたぞ」

「えー！ そばめし！ やつたー、ちようと食べたいと思つてたんだ〜」

これはきつと自分でそばめしが食べたいと言つたのを忘れているな。でも、幸せそう

な笑顔でそばめしを食べているマヤの顔を見ると、それを言うのは野暮つてもんなのかなと心の中で思うのであった。

朝ご飯を食べた後、昨日一日かけて復習した中学生時代のノートを軽く確認して、ここを質問されたらどう答えたら良いだろうかと頭の中で予行演習しているとマヤから、「兄貴ー！ 早く行こうー！」

と呼ばれてしまった。時計を見ると、9時ちよつと過ぎ。勉強会は10時から始める予定なので、少し早い気もするがそろそろ行つてもいい頃だろう。

携帯をポケットに入れ、大学生の時から愛用しているやや大きめの肩掛けバッグに、自分のノートと筆箱、それに何も書いていないルーズリーフを入れる。ああ、そうだからも持つて行こうと、『コーヒーから学ぶ数学』を本棚から取り出して、バッグの中に突っ込む。これで準備完了だ。

「よし、行くか！」

待ちきれなかったのか既に玄関の前にいたマヤに声をかけ、僕とマヤはラビットハウスへと歩き始めるのだった。

カランカラン

「いらっしやいませー」

ラビットハウスで僕たちを迎えてくれたのは、チノちゃんでもマスターでもなく、紫色の髪をツインテールにした可愛らしい女の子だった。高校生っぽいし、バイトなんだろうか？

そう思っていると、奥の方からチノちゃんが出てきた。手には春休みの課題と思われる冊子を持っている。

「やつほー、チノー！」

「マヤさん、それにシズさんもいらっしやいませ」

「なんだチノ、知り合いか？」

ツインテール少女はチノにそう尋ねた。

「はい。こちらが私のクラスメートのマヤさんで、その横の男の人がお兄さんのシズさんです。シズさんは、おじいちゃんが居たときから来てくれている常連さんなんですよ」

「へえ、そつか。私はリゼだ、よろしくな」

そう言つて、こちらに手を差し出してくるリゼちゃん。こちらも手を差し伸べて握手に応じると、彼女はそのスタイルの良い身体からは想像も出来ないような力で握つてきた。痛いというほどではないものの、そのがっしりと握つてきた手を考えると、きつと

リゼちゃんは何か運動をやっているのかな？

そう思つて尋ねようとした瞬間、後ろの扉からカランカランと扉の開いた音が聞こえた。

「お、おくれちゃった〜」

息を切らせながら店内に入ってきたのは、マヤの幼馴染みのメグちゃん。マヤからよく話にはあがつていたが、こうして会うのはマヤとメグが小学生の時からだ。

「リゼさん、あちらがメグさんです。メグさん、このツイントールの方がうちでアルバイトをしているリゼさんです」

この後、皆で軽く自己紹介をしたのだった。それにしても、リゼが軍人の親父さんの影響とはいえ、護身術とかを習っているとは思わなかった。可愛いけれども凜々しいとは、パワフルな女の子だな。

さて、話が逸れたが本題に戻ろう。

店番は完全にリゼちゃんに任せられるらしく、チノちゃんも今日は私服だ。ティツピーもカウンターでコロコロと転がっている、ってマスター楽しいのかな……。

チノちゃんもマヤもメグちゃんも、既に春休みの課題を机に広げて準備をしている。僕もさっさと準備しないと……って何をすればいいんだ？ 人に勉強を教えたことが

少ないから、どうしたらいいのか分からない。

思わぬ弊害に頭を悩ませていると、マヤが、

「それじゃあ兄貴は、私たちがわからない問題があつたら質問していくから、それに答えてね！ それでいいでしょ、チノ、メグ」

「はい、いいですよ」

「いいよ〜」

そう言うと、三人は黙々と宿題に取りかかるのであつた。あれ、もしかして僕要らない子ですかね。

ちよつと凹んでいると、リゼが全員分のコーヒーを持ってきてくれた。

「はい、これ飲んで頑張れよー！」

「「「ありがとう！」」」

コーヒーを一口啜ると、いつもと変わらない美味しい味が口いっぱい広がった。ほつと一息ついていると、早速チノちゃんが遠慮がちに質問してきた。

「あの……シズさん、ここの問題なんですけど……」

「あー、そこはね、展開したときに出てくる側面の扇形の弧の長さが、底面の円の円周の長さと一緒に一致するから……」

「なるほど！ わかりました！」

いきなり空間図形とは恐れ入った。しかもこれ、普通の中学1年生だったらかなり難

しめの問題だと思っただが……いつの間にかこんなに難しくなつたんだ。

学習内容の変化に驚いていると、次はメグちゃんから質問が来た。

「お兄さん、この問題なんだけど……」

「えーと、その問題は、油の中に入っている箱の体積分の油の体積を引いてあげれば大丈夫だよ」

「そっかー！ありがとう、お兄さん」

理科の浮力の問題だ。しかも、水じゃなくて油だからちよつとややこしい。よくこな問題、皆できるよなと感心していると、マヤから質問が飛んできた。

「兄貴ー！これ、どうやって解くの？」

「どれどれって、ああ、これは年代を覚えておけば簡単だよ。そうだな……723年は、何さ三世一身法。743年は、無しさ壑田永年私財法、なんていう風に語呂合わせで覚えれば、年代順に並べるのは一瞬だ」

「そっかー、なるほど！ありがとう兄貴ー」

歴史で、時代順に並べろという問題。ちなみに問題文には、平城京遷都、三世一身法、壑田永年私財法、平安京遷都だった。これならまだ普通くらいの難易度だが、もつと難しくなるとここに国分寺建立の詔や古事記、日本書紀の年代などが入ってくる。

この後も次から次へと質問が飛び交い、次にコーヒを飲めたのはお昼休憩に入ると

きなのであった。

「わく、これ美味しいね〜」

「ほんと、すっごい美味しい!」

「美味しいです……!」

リゼの作ってくれたナポリタンに舌鼓を打つ三人と僕。本当にこれは絶品で、文句のつけようが無い味だった。もういつそのこと、ここを食事処に変えてしまったらどうだろうかと半分本気で思ってしまったほどだ。

「将来、リゼはいい嫁になるな」

皆から寄ってたかつて褒められたことに照れているのか、リゼは顔を真っ赤にしている。その反応がまた可愛いなと思っていると、恥ずかしさに耐えられなくなったようにリゼは店の奥の方へと逃げるように去っていった。

リゼがこちらに戻ってきたのは、それからしばらく経ってからだった……。その間に一人も客が来ていないのは、本当にラビットハウスらしいやと、心の中で思った僕であった。

そろそろ時刻は3時をまわろうとしている。昼ご飯を食べた時間を除いたとしても、もう4時間は勉強しているだろう。さすがにもう集中力も切れてくる頃だし、そろそろ

勉強会を終わった方がいいんじゃないかと思っていると、三人が同時に、

「「終わった〜!」」

と、言うのであった。え、あの量をもう終わらせたの!? と驚いていると、どうやら今日はおおよそ2教科終わらせるか、3時までやろうという話だったらしい。それにしたって疲れただろうと思ひ、僕は三人に何か奢ることにした。

「リゼー、三人にケーキを頼むー! 今日支払いは全部僕だから、遠慮しないでね」  
「え、いいの!」

「ちよ、ちよつと待って下さい! 私の分は自分で出しますから!」

「勉強教えて貰った上に、奢って貰うなんて悪いよ〜」

チノとメグは遠慮しているみたいだが、別にケーキを食べたくないわけではなさそう  
だ。

「今日は、皆頑張っていたから特別だよ」

そう言つて、三人にはご褒美のケーキをあげるのであった。最初は遠慮がちだった二人も、食べ始めるとすぐにとろけそうな程幸せな笑顔を浮かべて、ペろりと食べてしま  
うのだった。

「さて、勉強会も終わったようだし僕はそろそろ帰ろうと思うけど、三人はこれから遊び  
にでも行くのかい?」



そう聞いてみると、どうやらこれからおしゃべりタイムにしようという話だったらしく、まだここに居るとのことだった。

「それじゃありげ、お会計お願い」

「ああ、しかし4人分ともなると結構な金額になるが良かったのか？」

「勿論。だって学生が勉強という本分を全うしようと集まっているんだぞ、ここは何が何でも大人が払ってやるべきだろうさ。それに、これでもそこそこ稼いでいるからな、これぐらいの出費だったら問題ない」

それに中学生の女の子達に払わせているようでは男が廃るといふものだ。

「ちなみに何の職業に就いているんだ？」

「小説家だ」

「へえー、ちなみにどんな本を書いているんだ？」

「きつと、一番有名なのは『コーヒーから学ぶ数学』だろうな」

「これで知らないと言われたら若干傷つくな……。と思ったが、どうやらそれは杞憂だったようで、

「何！ あの本ってシズが書いたのか！ 私もあの本は凄く分かりやすいから使わせてもらってるぞ！」

と、大変な好評を頂いた。意外と周りにも使っている人っているんだなと自分の本

なのに、客観的な反応しか出てこない僕であった。

「ありがとうございました」

ラビットハウスから帰る道の途中、今日は色々面白かったなと思いつつ歩いていると、そういえばこの街に戻ってきてから毎日が楽しいと感じるようになってたけど、やっぱり故郷っていいなと思うのであった。

甘い物は好きだけど、自分に甘い人にはなりたくない  
常々思っているよ

チノちゃんとメグちゃんとマヤとラビットハウスで勉強会をした次の日、僕はまたもや朝の散歩に出かけていた。

「やっぱり朝に歩くのって、清々しい気分になるから最高だよな〜」

我ながらジジくさい考えだと思うが、事実清々しいんだからしょうがない。でも、こうして朝に出歩けるなんて、つい最近までは思ってもみなかったことだ。向こうの方にいた時は、翠も凜も僕も大学生とは思えないような忙しい生活を送っていたからな……。

翠と僕が大学1年生だった頃は、どうやったら会社を建てられるのかと調べたり、作り方が分かっただらその後は色々面倒な手続きをしたり、会社作るのにもお金がいるからバイトをしたりと、会社を作るという目標に向かって一生懸命やったものだ。

その上で大学の講義に行って、僕の場合は司法試験予備試験に向けての勉強もしてと、初めてだらけだったこともあり毎日大変だった。

その翌年は、凜が翠と僕と同じ大学に無事入学出来たので、待ちに待った会社の設立

をして、三人で協力して僕たちの書いた本を世に出すために、少しでも安く製本できる印刷所を探したり、様々な本屋を訪ねて本を置いてくれるように交渉したり、何よりも採算を見込めるような面白い小説を書くために日々努力を重ねた。

その甲斐あってこの年は、翠の『うさぎになつたバリスタ』や、僕の『コーヒーから学ぶ数学』など、今のところうちの出版社を代表するような作品達を発売にこぎつけられた。

しかし、10月。司法試験に受かり、司法修習生となつた僕は学校も会社も辞め、その後1年間全国各地へと行き、弁護士になるための実地研修に励むことになる。

当時は翠と凜と毎日連絡を取り合っていたとはいえ、僕が抜けて二人で会社をまわっていた翠と凜も、裁判等の慣れない実習をしていた僕も、どちらも毎日疲れきっていて、泥のように眠る日も少なくなかったので、連絡をしても長話をするのではなく、いつも5分も経たない内に切ってしまうのだった。

それでも二人の声を聞いたら、また明日も頑張ろうという気持ちになれたので、この日課はずっと続けていた。

ちなみに一度、二人と会えた時に毎日電話をかけるのは迷惑じゃないかと確認したことがあったのだが、翠からは、

「もう、シズくんは変なところで遠慮するんですから〜!」

と、ぶんぶんと可愛らしく怒っているような口調で言われてしまい、続いて凜から、「そうですよ先輩！ 私たちだって、先輩がいないのは寂しいんですから、ちゃんとその分毎日電話してくださいよ！」

と、もうなんか、こつちが恥ずかしくなってくるような直球な言葉を言われてしまった。

その時は、そんな二人の言葉が心に響き、思わず涙ぐんでしまったものだ。我ながら涙もろいことだと思いがな……。

まあ、そういう訳で毎日翠と凜から元気を貰いながら頑張った1年間だったということだ。

そして、僕が晴れて弁護士資格を得て二人のもとへ戻って来た3年生。ん？ 僕は既に大学を辞めているから、この言い方は正しくないな……。

訂正して、翠が3年生、凜が2年生の時。

僕が翠と凜のもとへ戻って来たのはこの年の冬だが、次年度までに1本小説を書いたり、年度末の決算をやったりと、大学に通い続けている翠と凜よりは時間のある僕は、とりあえずできる仕事をするのであった。

今思えば、この日々は向こうでの4年間の生活の中では一番暇な日々だったな。

次の年、つまり翠が4年生、凜が3年生の年。

この年はまず翠は卒論に時間を取られて、中々小説を書いたりということは出来なかった。そういうわけで基本的に僕と凜の二人で書店への営業活動などの仕事を行っていたのであったが、7月に凜が過労で倒れてしまったため、それからしばらくの間は僕一人で会社のほぼ全ての業務を行ったのだが、その時は、本当に死ぬんじゃないかと思いうぐらいに大変だった。

その後、凜が大学を辞めて本格的に仕事を始めてからは、凜が優秀なおかげで僕は本来の仕事である物書きに戻ったのだが、あまりにも本業から離れていたせいかな凜からは没ばっかりもらってしまったのであった……。

何か思い返してみると、自分が何の職業に就いているのか分からなくなってきたそうだが、今はこうして朝からゆつくりと散歩に出かけられるほどには時間に余裕のある日常を送ることができているのは間違いない。向こうでの忙しさが嘘のようだ。

こんな感じで、僕は昔のことを思い出しながら、街の中をあっちへふらふらとこつちをふらふらとまるで高校生時代の翠のように歩いていった。

その歩みを止めたのは、10時のことであつた。なんか小腹が空いてきたなと思ひ、今何時だろうとポケットに入れていた携帯を見てみたら、いつの間にか散歩を始めてからかなりの時間が経っていて驚いた。

自分自身の時間感覚が狂っていることを実感しながらも、僕はその空いた腹を満たす

ために、これまた高校生の時には大変お世話になった甘味処へと足を向けるのであった。

まるで童話の中のような木組みの街にしては珍しい、古風な看板。その看板には渋い文字で、甘兎庵と書かれている。ラビットハウスとは違い、ここは喫茶店というよりも茶屋といった雰囲気のお店だ。

実はこのお店には翠や凜と来たことは一度も無かったりする。いつも決まって一人で来ては、僕の大好物である栗羊羹を食べるのであった。

その他に、口調は荒いけれども言動はとても優しいおばあさんと世間話をするのも、ここに来た時の楽しみだった。

### カランカラン

あのおばあさんは元気かなと思いつながら店内に入ると、そこに居たのは緑を基調とする着物を着た、黒髪ロングの女の子であった。

「いらつしやいませ、お好きな席にどうぞ」

まだ午前中ということもあってか、店内に客は数人しか居ない。でもラビットハウスよりはよっぽど混んでるなど失礼なことを考えながら、僕はまだ一人も客が座っていないかったカウンターの席に腰を下ろした。

「お客さんは甘兎は初めてですか？」

「いや、昔は結構来てたよ。今日はかなり久々だけだね」

少なくとも、4年は来ていないのは確かだ。けど、なぜ初めてか聞いたのだろうか、と思っている少女が、

「ではこちら、おしながきと指南書でございませう。今、お茶を持ってきましたね」

と二つの冊子を渡し、店の奥へと入っていった。

指南書とは一体何であろうかと疑問に思いつつ、ひとまずはおしながきを見てみようと思ってみると、そこに書かれていたのは、前に来たときとは全く異なっている、一見商品名とは思えないような単語の表であった。

煌めく三宝珠、雪原の赤宝石、海に映る月と星々、などなど、これらは本当に甘味なのかと疑いたくなる名前の数々。

もしかして指南書って、この中二病染みたメニユウの解説書なのかと一人悶々としながらおしながきを眺めていると、黒髪少女がやって来て、

「こちらお茶です。ご注文はお決まりですか？」

と、聞いてくるのであった。

この全く商品の想像ができないおしながきだけでも、ここで指南書を見てしまうのは些か勿体ないと感じた僕は、分からないんだったら運任せとまでは言わないが、どれかを試しに選んでみようと思ひ、



「じゃあ、この海に映る月と星々で」

と、注文するのであった。

「はい、海に映る月と星々一つですね。少々お待ち下さい」

そう言つて、再度店の奥に入っていく少女。

その後ろ姿を見ながら僕は、折角久しぶりに来たのだから栗羊羹がどれなのか確認して頼めば良かったなど、若干後悔したのであった。

お客さんが少ないこともあつてか、その注文した甘味は5分もしない内にやつてきた。

ゴトツ

「こちら、海に映る月と星々です」

僕の前に置かれたお椀の中には、白玉栗ぜんざいが入っていた。なるほど、ぜんざいの餡子を夜の暗い海に見立てて、それに浮かんでいる白玉で月明かりを表現しているのか。白玉の間には刻んだ栗がアクセントに置かれており、とても美味しそうだ。そして何より面白いのは、白玉に突き刺さっている兎型の爪楊枝。

このお店の甘味が絶品なことはよく知っているが、更に視覚的にも楽しい要素が含まれるようになって、一段と美味しそうに感じる。

「店員さん、これは君が作ったのかい？」

昔から比べると、見た目がもの凄いい進化を遂げていたため、感動して思わずそのぜんざいを持ってきてくれた少女に聞いてしまった。

すると少女は、

「これは、私のおばあちゃんが作ったんですよ。私が作ったのは、このメニュー名です！」

と、キラキラとした笑顔で、特に後半が、答えてくれた。

この数々の摩訶不思議な名前は、君が作っていたのか……。数年後に黒歴史になっていないことを切に願っているよ。

それはそうと、これを彼女のお祖母さんが作ったということは、まだあのおばあさんは生きていたのか。しかもバリバリの現役で働いているらしいな。

ティップーもといマスターの時のように後悔しないためにも、これは是非とももう一度お会いしないとイケないなと思ひ、少女に頼んでみた。

「あの、君のおばあさんに会わせて貰うことってできるかな？」

いきなりこんな事言ったら断られるかなと思つていると、少女が、

「いいですよ、おばあちゃん！ ちよつと来てー！」

と、すぐに呼んでくれたのであつた。

「なんだい千夜、大声なんか出して」

「あのね、おばあちゃんに会いたいわって人がいるんだけど……」

そうやって少女、千夜という名前らしい、が告げると、おばあさんが数年前と全く変わらなしかめつ面でこちらを向いた。

「あんたかい、久しぶりだね」

「お久しぶりです、おばあさん」

互いに挨拶を交わす僕とおばあさん。千夜ちゃんは状況が理解できていないらしく、僕とおばあさんの方を交互に見ている。

「あんた、あのジジイの所にはもう行ったのかい？」

「ええ、まさかももう亡くなられているとは思っていませんでした」

挨拶の次に飛び出した言葉は、マスターの事だった。おばあさんとマスターはいつも張り合っていたが、なんだかんだで仲の良い方達であったので、きつとおばあさんもマスターの事を気にしていたんだろう。

「そうかい、あそこに行つてたんだつたら私から言う事は何もなさ。それで、今日も栗羊羹食べていくのかい？」

「お願いします。おばあさんの作った栗羊羹は絶品ですから、是非とも食べたいです！」  
そう本心からの言葉を告げると、おばあさんは口角を上げて、ふっ、と微笑を浮かべ

ながら、

「分かったよ、ちよつと待つてな！」

と言つて、戻つて行くのであつた。

店内に残された千夜ちゃん。彼女は、おばあさんが居なくなつたあと、僕に、「あの、おばあちゃんと知り合いみたいですけど、どういう関係なんですか？」

と質問してきた。

どういふ関係か、そうだな……、

「昔、といつても4年くらい前の話だけだね。ここには週に一度か二度必ず来ては、栗羊羹を食べながらおばあさんと世間話をしてたんだ。そして、おばあさんには色々とお世話になつたんだよ」

これまでの人生において、おばあさんの話ほど役に立つたものは無いだろう。知恵袋的なものではなく、人としてどう生きるかというような深い話を教えて貰つたもんだ。

そう千夜ちゃんに伝えると、千夜ちゃんは、

「へえー、そうだったんですね」

と、一人納得していた。

そうして千夜ちゃんと少しお話をしていると、おばあさんが栗羊羹を持って、やつて来た。

「はいよ、ゆつくりしていくんだよ！」

そして、おばあさんは僕にいつもよりひとまわり大きな栗羊羹を渡すと、足早にその場を立ち去った。

また、それに続き千夜ちゃんも他の客に呼ばれたので、一人になった僕はおばあさんの言つた通り、ゆつくりと味わつて食べるのであつた。

「ありがとうございました。また来てくださいね」

お会計を終えた僕にそう言う千夜ちゃん。

言われずとも、ここへはまた一週間後にはまた来るだろうな、と心の中で呟きながら、一言お礼を告げて甘兔を出た僕。

お昼ご飯を食べる前にお腹いっぱいになっちゃったなと思ひながら、手にマヤへの土産に買った栗羊羹を持ち、家への道を歩きだした僕なのであつた。

今日も木組みの街にはいつもと変わらない穏やかな空気が流れている……。

子供の頃はできていたのに、大人になると難しくなる事ってあるよね

僕は今、全速力で走っていた。

最近あまり運動していなかったせいで少し走っただけで息が苦しくなってくるが、目的地に着くまではこの足を止めるわけにはいかない。

僕が向かっている先は、この街で最も大きな駅である。

どうしてこんな状態になっているかと言うと、それは数時間前にかかってきた1本の電話が原因である……。

昨日、僕は甘兎庵へ久々に行って美味しい和菓子を食べたのだが、栗羊羹を食べ終わった頃から段々店が混み始めて来たので、すぐにお暇することにした。

それから真つ直ぐ家に帰り、マヤにお土産を渡し、お昼ご飯と一緒に食べ、午後はゲームなどをして遊ぶという大変楽しい一日を過ごした僕だったが、夜寝る前、もうこつちに帰ってきて5日も経つ事だしそろそろ仕事を始めないとまずいな、と思い、浮かんできたアイデアを基に次の小説の原案をカタカタとパソコンに打ち込むのであった。

その後色々試行錯誤しながらなんとか形になりそうだといいところまで来たので、そろそろ寝ようかなと思いいパソコンを閉じて、布団に包まろうとしたのだが、ふと窓の外に目を見やると、既に外が明るくなっていた……。

時計を見たら、針が朝の6時を指していて、いつの間にかこんな時間が経っていたんだ……。と、驚きつつ、気付かずに6時間以上パソコンに向かっていた自分に呆れるのであったが、もういいや眠いし寝ちゃお、と睡魔に身を委ねるのであった……。

「ふわあゝあ、よく寝た〜」

大きな欠伸をしながら身体を起こし時計を見ると、時刻は昼の1時を少し過ぎたところだった。

よく誰にも起こされなかったなと思いいながら、枕元に置いてあるスマホを確認すると、翠から1件のメールが届いていた。

朝の11時に連絡してくるなんて珍しいこともあるもんだ、とメールを開くとそこには、

件名：木組みの街へ行く件

本文：今日の11：11発の列車で凜ちゃんそちらに向かうので、駅で待っていて下さいね？

と、短くシンプルな文章が書かれていた。

あれ、ちよつと待てよ。その時間に出発するんだったら、こつちまで約2時間半で来られるんだから、1時半過ぎには到着するののか。

その結論が頭の中に浮かんた瞬間、僕は全身から冷や汗がどつと出てくるのを感じた。

これはまずい。駅で待っていると書いてる以上、僕が居なかつたら翠はきつと怒るだろう。同じ列車に凜も乗っているという事は、下手したら凜からもぶんぶん怒られるかもしれない。

凜が怒る姿は可愛いから是非見たいが、翠のお叱りは心の底から受けたくない。あの高校3年生の文化祭の時に翠の怖さは身に染みて理解したからな……。本当に普段温厚な人って怒ると別人のようになるんだよな。

と、呑気にそんな事考えている場合じゃない。

現在時刻は13:07。家から駅までは走って約25分だから、今から急いで行けば翠の言う列車にはぎりぎり間に合うはずだ。

そう判断した僕は、部屋の箆笥から動きやすそうな服を取り出して、慌てて着替えるのであった。

そして洗面所に駆け込み、急いで顔を洗って歯を磨き、携帯と財布を持ったのを確認



したら、昼過ぎに起きたと思つたら何やら慌ただしく動いている僕に不思議そうな目を向けているマヤに、

「行つてきますー！」

と、大声で告げて全速力で走り出した。

こういう訳で僕は、現在進行形で息を切らせながら走っているのである。

「はあつ、はあつ、こんな走るなんていつ以来だよー」

脳に酸素が十分に届いていないのか、意図せずに思つたことがそのまま口に出てしまった。幸いにも今は周りに人が居なかつたので、その言葉が聞かれることは無かつたが、もし聞かれていたら変な人だと思われていただろう。

いや、いい大人が息を切らしながら全力疾走している時点で十分変だな。

駅までは森林公園を突つ切る道が一番早いので、公園の中に入り、固められている歩道を外れ、草を踏みしめながら走っていると、足をもつれさせて転んでしまった。

「痛てて……。膝擦りむいたっばいな」

そうは言えども、絆創膏は持つてないし、かと言って歩くわけにもいかないのです、ヒリヒリとした痛みを考えないようにして、僕は再度走り始めた。

時刻は13:25。正確な時間までは分からないが、僕に残された時間は15分有る

か無いかだろう。それなのに、道のりはようやく半分来たかどうかだ。

これで果たして列車が到着するのに間に合うのかと不安になってきたが、考えたつてしようがない。今するべきなのはとにかく足を動かすことだ。

それからしばらく走って、ようやく公園を抜け駅の近辺まで来ることができた。

「ぜえっ、ぜえっ、ああ、やっと駅が見えてきた」

息が荒いのは変わらないものの、ランナーズハイになつてきたおかげで疲れを感じなくなつてきた。

これはしめれたと思つた僕は、ラストスパートをかけて最後の力を振り絞りながら走るのであつた。

駅の中に入った僕は、天井から明るい太陽の光が差し込むそのホームに急いで行き、時間を確認した。

時計の針は短い針が1。長い針が8を指しているの、つまり現在は13:40。

これは間に合つたのか、そうでないのか分からない。いやでもここまで翠や凜の人影は見えなかつたしな……。

と、考えていると、ホーム内に設置されてあるスピーカーからアナウンスが響いた。

「まもなく、1番ホームに電車が参ります。白線の内側でお待ちください。」

間違いない。翠が嘘をついていなければ、この列車に乗っているはずだ。

そう思った僕は、一番端にある線路の方へと向かった。

ゆつくりと駅構内へと進入してくる青い車体の列車。降りる人の邪魔にならないように、少し離れた場所に待機していると、すぐに列車は完全に停止し、

プシュー

と、列車特有の開閉音と音楽を鳴らしながら、扉が開いた。

さて、翠と凜は一体どこに居るんだと、降りてくる人を目を凝らしながら見ていると、大勢の旅行者に混じって見慣れた顔があるのが分かった。

「おーい！ みどりー！ー！ りーん！ー！」

二人の名前を大声で呼んで手を振ると、向こうも気付いたみたいで、手を振り返してくれた。

そして、こちらに駆け寄ってくる二人に僕は、

「翠、凜。おかえりなさい！」

と言うのであった。それに対して翠と凜は、

「ただいま！」

と、息びったりに返してくれた。

この事がなんだか面白くて、僕だけでなく二人も一緒に、3人揃って笑ってしまうのであった。

ああ、これからはまた3人で楽しくやっつけていけるんだな。

そう感じた僕は、喜びと幸せが心の中から溢れてきて、自然と自分でも分かるぐらいに笑顔になった。そしていつかと同じように口からするつと、

「二人とも、これからもよろしく！」

と、言葉が出てくるのであった。

それを聞いた二人は、

「こちらこそよろしくお願ひします！」

と、これまた同時に言うのであった。

あはははは！

駅の喧騒の中、一際大きく聞こえる笑い声。その発生源は、クリーム色の髪が美しいミステリアスな女性と、その横に立っている、まだ幼さを残している顔をしている女性。それに、その二人と向かい合うように立っている一人の男性からだ。

一見どういふ関係なのか全然分からない三人だが、ひとたびペンネームを聞けば、すぐに推測できるだろう。

それほどまでに有名な彼らは、見ているとそれだけで笑顔になつてくるような笑みを浮かべながら、心底楽しそうに談笑していたのであった。

すっかり暖かくなり、春を感じさせる陽気な日々が続く木組みの街。  
今日もそこでは、また新しい物語が紡がれていくのであった……。

## これまでも、これからも

僕は今、木組みの街へと戻ってきた翠と凜と一緒に街の中を歩いていた。

「わ〜！ やっぱりこの街の雰囲気は素敵ですよ〜！」

そう言ったのは翠。そしてその隣では凜がこくこくと頷いている。

二人とも出身がこの街では無いため、ここに来るのは長期休暇中に帰省していた僕とは違い、実に4年ぶりになる。それにしても、自分の故郷をこんなに高く評価して貰えるのは、嬉しい限りである。

「ところで、翠と凜がこれから住む家はどの辺りにあるんだ？ あまり詳しく聞いていなかったが」

高校生の頃は、ホームステイをしていた二人であったが、さすがに大人になった今ではそういうわけにもいかないだろう。だから、どこか部屋を借りて住まないとなく、という話になっていたはずだ。

しかし、二人ともこつちに来るのが久しぶりだという事は、部屋を見ずに決めたのか？ 果たしてそれは大丈夫なんだろうか……。

心の中で心配していると、それを見透かしたように凜が答えてくれた。

「それなんです、翠ちゃんと相談した結果、二人で家を買ってルームシェアのような形にすることに決まりました！」

……え、冗談だろ？

いくら売れっ子作家で、最近他社の Walker という雑誌で『青山グルメマウンテン』という連載を持ち始めた翠と、この前僕たちの母校から、後輩たちに進路講演をしてくれないかと打診を受ける程、世間でもその名が知られてきた凛とはいえ、人生の中でも最大の買い物である家を買うなんて、大丈夫だろうかと思ひ二人の方を見てみると、翠が舌を可愛らしくペロツと出して、

「サプラ〜イズですー！」

と吐かしやがった。

結構心配していたんだが、その言葉を聞いて、ああ、なんか全然大丈夫そうだな、と気が抜けたのであった。

それもそうか。翠も凛もなんだかんだで相当な額を稼いでるもん。まあ、それは僕も同じ事だけど……。

しかし二人が家を買った事は、まるで知らなかったな。別に教えてくれてたって良かったのに……。

きつと、というか確実に、翠が、

「凜ちゃん凜ちゃん！ 私たちが家を買った事、シズ君には内緒ですよ？ 後でドツキリさせたいですから！」

みたいな事を凜に言ったんだろうな。

今、目の前で翠が、高校生の頃から変わらない、茶目つ気たつぷりのいたずらっぽい笑顔をしているのを見ると、大方間違つてはいないだろう。

何か、この僕の反応まで計算に入れられていそうなのが、翠の手のひらで転がされていくように無性に腹立たしい。

というか、本当にこいつ大学卒業しているのか？ 未だにやっている事が高校生の時とまるで変わらないじゃないか……。ああ、何となくまた凜が翠を追いかける日々が始まるんじゃないかと心配になってきたよ。

「えっと、シズ君？ さっきから黙りこくってますけど、大丈夫ですか？」

あまりに僕の反応が薄かったからなのか、遂には下から顔を覗き込むようにして、僕の方を見てくる翠。

お前が急に家買ったとか言ったからだろうが！ と、若干衝動に身を任せてしまった僕は、目の前にいる翠のもちもちした頬をつねったのであった。

ムニイイ

「ほよつ、なにひゆるんですか！ いふあいですよお！」



「お前家買ったとか、まだ次の小説のプロットすら決まってるのか、そういう重要な事はちゃんとみんなに連絡しとけー！」

「わー、わー、ごめんなひやい！ 反省してましゅから、しよのてをはにやしてくりやさーい！」

そう言われた僕はぱつと、翠の頬から手を離れた。

そうすると翠は、僕につねられた場所をさすりながら、むっとした顔をして、

「確かに私はシズ君をドツキリさせようと思いましたけど、何もほつぺたをつねることないじゃないですか……。もう！ そんな悪い子には、私たちと明日まで飲み明かしてもらうんですからね！」

と言うのであった。楽しそうな笑顔を浮かべた翠は、まるで小悪魔……。

「そうですね！ たまには、シズ先輩も一緒に朝まで飲みましょーよ！」

ああ、しかもこつちにも乗り気な娘が……。

二人とも中々お酒に強くて常識的な範囲で飲んでいけば気持ちよく酔えているのだが、生憎僕はお酒に苦手意識があり、何故かと言えば二十歳になって始めて飲んだ時に、悪酔い、二日酔いの連続コンボに苦しめられたからだ。正直自分でも飲み方が悪かったとは思うのだが、あの頭痛と吐き気がトラウマとなってしまう、あれ以来一滴もお酒は飲めていない。

だが、その事は翠と凜には伝えていないし、三人でお酒を飲む機会も無かったので、残念ながら二人は知らない。しかし、期待に満ちた二人の誘いを無下に断るのも心苦しいしなあ……。

「分かった分かった。今日は二人の引越しのお祝いだから、とことんいつまでも付き合うよ」

結局僕は悩んだ末に、久々の三人一緒の楽しい時間に浸りたくて、お家飲み会に参加するのであった。

「ふふ、シズ君が来てくれるということは、シズ君の料理が食べられるってことですね。楽しみです！」

「それが狙いか、翠。大したもののは作れないが良いのか？」

「先輩の料理は、十分過ぎるぐらいに美味しいですよ！出来ることなら毎日作って欲しいぐらいです！」

凜に同調するように頷く翠。

さすがに毎日作って欲しいは言い過ぎだろ。でもそう言ってもらったからには、腕にやりをかけて作らないとな！

そう考えた僕は、我ながら単純だなど思うのであった。

そんなやり取りをしながら歩いてみると、いつしか駅からだいぶ離れた所までやって

来ていて、そろそろ街の中でも端の方へと差し掛かってきた。ちょうど、僕の実家とは真反対の方だなと思つてみると、凜が、

「そろそろ見えてくるはずなんですが……。あ、ありました！ あの家です！」

そこに建つていたのは、まるでラビットハウスのような外見をした3階建ての木組みの家だつた。

それを見た翠は、顔に花が咲くような笑みを浮かべて駆けだし、凜はそんな翠を追いかけて走り出す。

僕はそんな二人の後ろ姿に、やっぱり何年経つても高校生の頃から僕たちは変わつていないんだな、と少し残念なような、それでいてどこかほっとするような気持ちになるのであつた。

「これからもよろしくな。翠、凜。」

小声で呟いた言葉は、穏やかな春風に流されてゆるりと街へと溶けていくのであつた。

酒は飲んでも飲まれるな、と、お酒は二十歳になってから。この二つは本当に大事だよ

「うう、頭痛い……」

眠りから目覚めた僕を出迎えたのは、強烈な頭痛だった。

昨晚、翠と凜と三人パーティーをした僕であったが、翠から注いでもらったロゼワインという桃色のワインをちびちびと飲んでいて、ようやく一杯目を飲み終わったと思っただけに酔って気持ち悪くなってしまい、トイレと友達になってしまった。

その後は翠と凜に心配されて、やれ布団やら水やらと色々迷惑をかけてしまう羽目になった……。

二日酔いというか悪酔いの症状に苦しみながらも二人に申し訳無く思っていると、僕が起きたのに気づいたのか凜がこちらに声をかけてきた。

「シズ先輩、起きましたか？ もう、飲めないんだつたらちゃんとして最初から言ってくささいよ」

大変申し訳ない。僕が昨晚、まるでお酒を飲めないのに見栄を張って飲んだばかりに、まだ朝日も昇りきつてないような薄暗い時間帯から迷惑をかけてしまうとは……。

「飲用アルコール、つまりエタノールは人間の体内ではアルコール脱水素酵素によって有害なアセトアルデヒドに変わって、その後それを酸化させることによって無害な酢酸へとするんですが、人によってはその酸化の過程を上手く行えない事もあるので、シズ君みたいに飲めない人も居るんですよ〜」

翠が僕が飲めない理由を詳しく説明をしてくれているが、翠は未だに、昨晚僕が作ったつまみに手を伸ばしながらペースを保って飲んでいるようだ。しかも顔は赤らんでいるものの、まだまだ理性を保ち続けているあたり生粋の酒豪といったところだろうか。

「翠ちゃんもそろそろ終わりにしなさい！ もう飲み始めてから6時間ぐらい経つでしょー！」

「じゃあ、次の一杯で終わりにしますね」

翠のその言葉を聞いた凜は、頭を抱えている。

「10杯以上飲んでおいて何言ってるの！ 月一程度とは言え、そんなに飲んだら体に悪いでしょー！」

翠はそんな凜のありがたい忠告に対して、耳を塞いで聞こえないふりをしている。飲めない僕が言うのも何だが、さすがに飲み過ぎだと思っぞ。

「はあ、本当に後一杯だけですからね。それじゃあ私はしじみ汁作ってくるので、シズ先

輩も翠ちゃんもテーブルの上に置いてある水を飲んで待つててくださいね」

そう言うところ、台所へと向かうのであった。

「凜ちゃんの言うことは尤もとはいえ、私、最初に皆で飲んだロゼワイン以降はブドウジュースしか飲んでないんですけどね……」

凜に聞こえないようにぼそりと呟いたその独り言は、僕の耳にはぼつちりと聞こえてきた。

「なあ翠、なんでわざわざ次の一杯とか言つて、お酒を飲んでるように見せかけたんだ？」

「聞こえてましたか……。それがですね、だいぶ前に凜ちゃんに私が飲ませたことがあります、その時確かコップ2杯とかそのぐらいで、抱きついてきたりとか普段しないような甘え方をしてきまして、かなり困ったんですよ」

困ったと言う割にはずいぶん嬉しそうな顔をしているが……。

「まあ、そこまではまだ大丈夫だったんですが、翌朝聞いてみたらその辺の記憶が曖昧らしくて、だから次に凜ちゃんと飲む機会があったら、どこまで飲めるのか調べてみようかと思ひましてね」

「それで凜に気兼ねなく飲ませるために、わざわざ瓶に入ったブドウジュースまで用意して観察してたつて訳か」

「そういうことです。結局今回分かったのは、今、凜ちゃんは多少気が大きくなっているものの、まだ酩酊や泥酔をしていないので、お酒に弱いつて事でも無さそうですね。自分からしじみ汁作りに行つたぐらいですし」

翠も凜も飲めるのに僕だけ全く飲めないっていうのも、何かこう、心にくるものがあるな……。自分の不甲斐なさに、ため息をつきたい気分になつてきた。

「ふふつ、飲めないことを悔しがるのはいいですけど、シズ君みたいに飲めない人の方がアルコールに依存するリスクを考えればずっと健康的だと思えますけどね」

「適度に飲むのであれば、そっちの方が心が心にも体にも良いけどね。まあ、家にはまだ中学生のママも居るから個人的な感情を除けば、飲めない飲まない方が絶対に良いとは思うんだけど」

「こんな時でも妹さんのことを考えている辺り、やっぱりシズ君はシスコンですね!」

やめてくれ、そのネタをことある度に使うのは。正直最近自分でもシスコンなのかな? つて思っているから余計に心に刺さる!

悪酔いをしているまっただ中でも、意外と元気に反応していると、お盆にお椀を3つ載せて凜が戻ってきた。

「しじみ汁持つてきましたよ。これがあれば、二日酔いも大分良くなるはずですよ!」

「ああ、ありがとう凜」

「さて、これを飲んだら私も一眠りしましょうかね」

「翠ちゃんはまだ全然元気そうなので、食器を洗ってきて下さい」

「……凜ちゃん、バツサリ切り捨てましたね」

「翠の普段の行いが悪いからだろ。自業自得だ」

「シズ君まで！ もう、二人ともひどいですね」

こうして僕たちはたわいない話を続けながら、お椀のしじみ汁を啜った。そして結局この後、眠たくなった僕たちはその場で雑魚寝をするのであった。

ジリリリリリリ

「凜ちゃん！ シズくん！ 起きてくださいーい！」

けたたましい目覚ましの音と翠の声によって僕はたたき起こされる。目覚ましの音が鳴る方を見てみると、そこには白い兎をモチーフにして作られた可愛い時計が、朝の9時半を指していた。

「二人とも起きましたか？ 少し遅いですけど、朝ごはん出来てますよ」

「ああ、ありがとう翠。すぐにいたたくよ」

翠は既に昨日の服から着替え終わっている上に、どうやらシャワーも浴びたようで、朝食を告げる声と共に仄かな石鹸の香りが漂ってきた。



「んう、まだ眠いです……。昼になったら勝手に食べるので、置いて下さい……。」  
その一方で凜はまだ食欲より睡眠欲の方が勝っているようで、まだ寝続けるようだ。

「凜ちゃんはしょうがないですねえ。じゃあ、先に食べてみましょうか」

そうやって口では呆れたような言葉を放つ翠だが、顔は慈愛に満ちていおり、まるで母親みたいな表情を浮かべているのであった。

いつも子供のように自由気ままな行動をするのに、こうして翠が我が子を愛する親のような表情になるのを見た僕は、そのギャップの差から失礼ながらも二度見してしまうのであった。

「結局、凜ちゃん起きませんでしたね」

「これからお前に振り回されるんだろうし、まあ今日ぐらいはいいんじゃないか?」

「ふふつ、また凜ちゃんには迷惑かけちゃいますね」

「分かっているんだつたら、何とか努力しろよ……」

翠が作ってくれた朝ご飯を美味しく頂きながら話していると、そろそろ時計が10時を示そうとしている。さすがにそろそろ帰らないとな。

「翠、美味しかったよ。ご馳走様」

「お口に合ったのでしたら何よりです」

「じゃあ、僕はそろそろ帰るよ」

「あ、帰るなら、これを持って行って下さい」

翠がそう言つて、袋に入つた物を渡してきた。

「これは？」

「引つ越しそばですよ。これから末永く宜しくお願いしますね」

そうやつて微笑む翠の姿を見た僕は、その言葉に嬉しくなつたのであつた。

「ああ、こちらこそ宜しくな。それじゃ、凜にも宜しくつて伝えておいてね」

「はい、ではまた。今度はお酒抜きで集まりましょうね」

「ははは……」

小さな出会いから、物語の歯車が動き出す

## 人生は出会いから始まる物語

翠と凜の家から帰る途中、どうやらアルコールが抜けきっていないかっいたらしい僕は、また痛み始めた頭をおさえながら、公園のベンチに座つて一休みしていた。

「あいたたた……。本当にお酒なんて飲むもんじゃないな」

木陰にあるベンチに深く腰掛けながら天を仰いでいると、春風に揺れる木の葉の隙間から、春の暖かな陽の光が零れ落ちてるのが見えて、ああ、もうすっかり春になったんだなあ、と回らない頭で考えるのであった

「そういえば、翠と会つたのも凜と会つたのも、今日みたいなよく晴れた日だったっけな」

翠とは1年生の時、同じ学級で、初めて見た時はミステリアスな美少女だなんて思ったものだが、文芸部で同じ部活に入つてからは翠に振り回されっぱなしだった。

特に翠が他の部活へふらふら行つて遊んでいるのを連れ戻すのは苦労したものだ……。当時はまだ翠キラーである凜が中学3年生の為高校に居なかつたので、同じ学年の僕が翠を探しに行つていたので、全く見つからずに下校時間になる事も結構あつ

た。

それ以来僕はどんな人でも外見で判断してはいけないということが大変良く分かったのであった。

そんな翠だが、実を言うと凜が文芸部に入ったのは彼女のおかげだったりする。

あれは確か僕たちが2年生に上がって、新入生達が入学してから1週間しない内の出来事だった。当時1年生だった凜を翠が手を引つ張つて無理やり文芸部の部室まで連れてきたのだ。

これはどうした事かと事情を聞いてみたら、翠が言うぶんには、

「この子が、部活なんて無意味な事だなんて言うもんですから、部活というものの良さを教えるために引つ張つてきました！」

との事で、僕ともう一人の先輩はたいそう頭を抱える羽目になった。その後、その翠が連れてきた後輩に、何故部活を嫌うのかと聞いてみたら、彼女の答えは、

「部活動をしている時間なんて、人生の無駄遣いです！ だから、そんな時間があつたら勉強でもして、今後のために有効活用するべきです！」

といったものだった。

お互いに険悪なムードを放っている同級生と後輩をどうにかしないと悩んでいると、隣に居た先輩は既にこの人達とは関わりたくないモードに入っていて、結局その場

は僕が仲裁するのであった。

まあ、それからどうなったかといえ、翠が渡る凜を自分が散々一年生の時にふらしていた部活群へと連れ回し、仮に部活が人生の無駄遣いだったとしても、その無駄遣いの時間は決して無駄にならない人生の宝物だよ、と言ったらいい。

その言葉が決め手となって、凜は翠の所属している文芸部へと入部したのであった。

……これは、後に凜が直接言っていた事なんだが、凜は僕らの母校の特待生試験に合格するために、それこそ死にものぐるいの努力をしていたらしく、勉強が全てにおいて最優先事項だったんだとか。

だから、凜は『将来のため』という言葉で自分を偽って、自分のやりたい事を我慢していたみたいだ。

正直、僕はその凜の気持ちは痛いほどよく分かるし、翠がそんな凜をどんな気持ちで見ていたかも容易く想像が出来る。

だからこそ、僕はこの凜の話を聞いた時に、何も言えなかった。だって二人の考えは、どちらとも僕の思想の一部なんだから……。

「……一人でいると、つまらないことばかり考えてしまっていけないな。結局、考え方は人それぞれなんだから、こんな事思ったところで意味なんてないのに」

ただ、僕が自信を持って言えるのは、翠も凜も僕の大事な親友であり、どちらが欠け

ていても、今の自分は絶対に無かったということだけだ。

「さて、20分近くここに座っている事だし、そろそろ行くか」

そうして僕は、若干沈んでしまった気分を回復させるために、街中の方へと歩き出すのであった。

「まだ春休みだから、学生も多いな」

街を縦断している川沿いを歩いていると、あと数日しか残っていない春休みを満喫しようとしているのか、それとも春の陽気にやられたのか、楽しそうな雰囲気纏っている学生が多く居た。

そういえばそろそろこの街に、他の地域から高校生達がやって来る時期だなあなんて思いながら、たまたま目に入ったドーナツ屋さんで、昼ご飯前の軽食でも摂ろうかとドーナツを買っていると、すぐ先の橋で何やら地図と睨めっこしている少女がいるのが見えた。

「噂をすればなんとやら、かな?」

売り子さんから袋に入ったドーナツを受け取って、おそらく道に迷っているのであろう少女の方へと歩みを進め声をかけてみた。

「道に迷っているのかい?」

少女はその言葉を聞いて、地図から目を離し僕の方へと振り返った。

「えへへ、そうなんです。春からこの街の高校に通うんですけど、下宿先を探していたら迷子になっちゃって」

「ああ、やっぱり高校の新1年生だったのか。木組みの街は道が複雑だから、慣れていないと迷っちゃうんだよね」

「へえ、そうなんですか!」

毎年この少女のように街中で迷子になる子はいらるだろうに、学校や役所は対策を立てていないのだろうか? あれ、そういえば初めは翠も迷子になっていたような……。

「私、香風さんっていう家を探しているんですけど、知っていますか?」

香風? あれ? 聞いたことはあると思うんだけど、思い出せない……。というか僕もこの街に住んでいるとはいえ、ご近所さんと小中の友達以外で知っている名字なんてほぼ無いよな。

思い出せそうで思い出せない名字に頭を悩ませていると、少女が申し訳なさそうに、「え、えつと、分からないなら大丈夫ですよ! ありがとうございました!」

と言うもんだから、自分から声をかけているのにも関わらず何もできなかつた事を歯痒く思いながら、そつと手に持っていたドーナツを差し出すのだった。

「何も力になれなくてごめん……。せめて、これだけでも食べてくれ! それと、道を

聞くならラビットハウスという喫茶店に行ってみるといい。きつと教えてくれるはずだから！　じゃあ、これからの高校生活が楽しいものであることを祈っているよ！」

僕が何故急にこんな風に言いたいだけ言っただけ逃けたのかといえば、周りから突き刺さる、こいつ不審者じゃないかみたいなの視線が痛かったからである。

このご時世、こんな僕みたいな冴えない男が未成年に話しかければ絶対こうなるって、少女に話しかける前に気づけたはずなのに、何で僕は話しかけてしまったのかああ！　ああ、でもあの名も知らぬ少女は困っていたようだし、悪いのは明らかに香風さんを知らなかつた僕だよなああ！

上のような自己嫌悪に陥り、僕は早歩きでその少女の元を足早に去るのであった。心の中で、亜麻色の髪の少女よ、本当に申し訳無かつた……、と思ひながら。

「なんか、不思議な人だつたな」

その少女、ココアは今会つたばかりの若い男の人の事を思い出していた。

見ず知らずの自分に、優しく話しかけてきてくれた青年の姿は、たとえ道案内に失敗していても、期待と不安が入り混じっている状況の彼女にとつては十分に嬉しいものであつた。

そういうえば、訳分らないままに何か受け取つちやつたな、と貰つた小袋の中身を見



てみると、そこにはまだ少し温かい出来たてのドーナツが入っていた。

「わ〜！ 美味しそうなドーナツ！」

ココアは貰ったドーナツを食べて英気を養い、青年に教えてもらったラビットハウスへと向かい始める。

この街って綺麗でかわいくて、住んでいる人も優しいな。うん、ここなら楽しく暮らせそう！

そう考えながら、春を祝福するように咲いている桜並木の下を歩くココアなのであった。

「はあ……」

「どうしたんですか？ 溜息なんかついて。幸せが逃げちゃいますよ？」

同じ頃、ようやく起きた凧は遅めの朝ご飯を摂りながら、深い溜息をつけていた。

「私には青山先生と条河先生が居てくれるだけで幸せですから、問題ないです」

「あら？ もしかして凧ちゃん、まだ酔ってます？」

「……別に、私の本心からの言葉です」

凧は恥ずかしそうにしながらも、素面でそう言った。

「最初はあるなにツンツンだった凧ちゃんがこんな事を言うなんて、あの頃は思っても

みなかったですね〜」

「うっ……」

「ふふっ、考えていたのはその事ですか。酔った拍子に思い出してしまったんですか？」  
翠の言葉に、可愛らしく唸りながら頷く凜。溜息の原因はどうやらそれについてのようだ。

「あの時に翠ちゃん、いえ、青山先生が私を引つ張っていつてくれなかったら、きっと私は今ここにいなかったでしょう。だから私は青山先生に感謝しているんですよ」

「それは、嬉しいですね。でも、感謝しているのは凜ちゃんだけではないですよ。私だって、シズ君だって、凜ちゃんには感謝しています」

口には出してはいないものの、ここに居ない静の事も翠と凜は感謝しているというのが、二人の雰囲気から伝わっている。

「ですから青山先生、お願いですから尊敬もできる先輩になって下さい。つまり、そろそろ逃げ出さずに原稿を書いて下さい！」

「そこに行き着いてしまいましたか〜」

この結論を告げてきた凜に、翠は、こんなに強かな子に育つとも思ってたなあ、とも心の中で思うのであった。

桜が美しく咲き誇る季節。木組みの家と石畳の街では、一人の少女との出会いから生まれる物語が幕を開けようとしていた……

## 未来を選ぶのは、いつだって自分自身

「兄貴、早く起きてよ！ 今日は一緒に遊びに行く約束でしょ！」

ほすつ、という音と共に、寝ている僕の上に飛び乗ってくるマヤ。その軽い衝撃に目を覚ました僕は、乗っかっているマヤを落とさないように抱えながら、仰向けになっていた体を起こした。

枕元の時計を確認すると、時刻はまだ6時30分と外に出るには些か早い時間帯でありながらも、マヤの出かける準備は既に万端だった。

「ほら！ 早く朝ご飯食べて行こうよ！」

そう言いながらこちらに向けた顔は、待ちきれなくてしょうがないといった表情であつた。

「分かった分かった。すぐに準備するから、少し待っててね」

「はい！」

良い声で返事をしながら、僕の布団から出て居間の方へと向かったマヤ。

正直この時間に外出しても、マヤの好きそうな店は開いてないと思うんだが、あんな風になったマヤはどう頑張っても止められないからなあ……。

「さて、マヤの機嫌を損ねない内にさっさと支度しますか!」

なんだかんだ思いながらも、結局僕は翠とか凜に言われるとおり、妹には甘いのであった。別に変えるつもりはさらさらないけどね。

「あーあ、春休みもあと明日で終わりかー」

4月になってすっかり暖かくなった街を、とことこと二人並んで歩いていると、マヤがふいにそう言っただけ息をついた。

「もう私も2年生になるし、そろそろ受験のこととか考え始めなくちゃいけないのかなあ」

「そうだね。マヤは、僕の行ってた高校と、もう一つの高校、どっちに行ってみたい?」

木組みの街にある高校は2校で、1つは、翠や凜、僕が通っていた学校だ。

大きな特徴を挙げるとすれば、学生層が極端に偏っていて、秀才とお嬢様がやけに多い事。勿論これには理由がある。この学校は私立校で毎月結構な授業料がかかる為、お金持ちか、よほど勉学の意欲のある人しか受験しないからだ。

それに特待生制度があるので、勉強に自信がある人は、入学金や授業料が免除されるこちらの試験を受験する人がほとんどだ。ちなみに、翠も凜も僕も、特待生試験に合格して入学した特待生だった。

もう一つの高校は、街の外からも沢山の人がやって来る、高校だ。

昨日僕が会った亜麻色の髪の少女も、下宿先を探していたという事は、きっとその高校に入学するのだろうか。いや、彼女には本当に悪い事をした。次会ったら謝らねば……。

話を元に戻そう。こちらの高校に入学するメリットとしては、色んな街から色んな人が集まるので、本だけでは分からない様々な話が聞けたり、後、行動力のある人が集まるので、文化祭や球技大会などの行事はとても楽しいという話は聞いたことがある。

この2つの高校は、面白い部分が少し異なっているだけで、どちらを選んでも青春を謳歌する場としてはとてもいい所だ。現に僕も、翠と凜と知り合ったのは高校の部活でだったしな。

だから、マヤにはどちらの高校を選ぶのか、存分に悩んで貰った上で決めてもらいたいと僕は思っている。

僕がそんな事を考えていると、僕の質問にマヤが答えた。

「んー、今はまだわからないかな。これから自分が何をしたいか、どんな風になりたいかをちゃんと見つけてから決めたいんだ」

照れた笑いを見せながらそう言うマヤに、僕は驚嘆した。僕が今のマヤの年齢だった時に、こんな立派な回答は返せていただろうか。勿論、答えは否だ。

そもそも僕が高校を選んだ時なんか、授業料免除という文言に惹かれて特待生試験を受けたら偶々合格したという、今思い返せば中々向こう見ずな行動だった。

だから、それが正しいか正しくないかは別として、マヤが自分で考えてその答えを導き出したという事実は、僕の心に深く突き刺さった。

「そうか……。マヤは大人だな」

そう言つて頭を撫でてやると、マヤはえへへと嬉しそうな顔をしたのであった。

それからしばらく歩き、木組みの街の中でも特に入り組んだ地域までやつて来たマヤと僕。

今日のお目当ての場所は、よほど木組みの街に詳しくないと知らないであろう、非常に分かりづらい所にあるゲームセンターだ。

「という訳で、ゲームセンターにやつて来ました」

「ここが、あの都会で有名なゲームセンター！」

目をきらきら輝かせながら、期待のこもった表情をしているマヤ。ただ、期待を裏切るように悪いのだが、このゲーセンにはプリクラとかそんな可愛い物は無く、あるのはレトロなゲームばかりだ。

さて、中に入ると案の定マヤは当てが外れたようだがっかりしていたが、そこにあつ

た1972年発売の、アーケードゲームの元祖とも名高い某卓球ゲームや、過去に社会現象にもなった某シューティングゲーム等をプレイしている内に面白くなってきたように、二人で時間を忘れるほど熱中したのであった。

時刻は11時。ゲーセンに入ってから、かれこれ3時間位は経つただろうか。マヤもレトロゲームを大体堪能し終わって、手持ち無沙汰になっているようだった。

「じゃあマヤ、そろそろ行くか」

「ん、楽しかった!」

マヤがそう言うてくれるのなら、僕も連れてきた甲斐があるもんだ。そうして僕達はゲームセンターを後にするのであった。

「マヤ、お腹空かないか?」

お昼時の街に流れる美味しそうな匂いに刺激された僕は、すっかりお腹が空いてしまっていた。だからマヤに聞いてみたのだが、どうやらマヤも同じだったようで、

ぐうー

と、返事の代わりにお腹を鳴らしたのであった。

「よし、それじゃあ何か外で食べていくか」



「うん！」

マヤは元気な返事をすると同時に駆け出して、僕の事を早く早くと呼んでいる。

まだ何を食べるかも決めていないのに気が早いなと思いつながら、そんなマヤの姿に僕は愛おしさを覚えるのであった。

その後、広場に出ていた屋台の食べ歩きを楽しみながら、軽めの昼食を終えた僕達は、マヤの新学期の持ち物の準備をすべく文具店にやって来た。

まあ、マヤには僕を気にせず、ゆっくり買いたい物を選んでほしいので、僕は僕で万年筆の陳列棚を見ている。

「そういえば、翠がいつも使っている万年筆って、マスターから貰った物なんだっけな」  
翠は、小説を書く時には常に、原稿用紙に万年筆というスタイルだ。

一方で僕は、専らパソコンに打ち込んで小説を作るので、翠のそのスタイルには結構憧れていたりする。個人的に、万年筆って浪漫が詰まっていると思っているからね。

折角の機会だし、一本買ってみようかなと思っていると、突然店の外から、きやあああ、と女の子の悲鳴が聞こえた。

真昼間から何か事件でも起きたのかと驚いた僕は、悲鳴の主は大丈夫か、と声が聞こえた方向に全速力で走り出した。

商店街の通りから細い裏路地に入って、昼間でもやや暗い道を疾走する。

店の入り口が開いていたとはいえ、文具店の中まで聞こえた位だ。あの場所から、そう遠くない位置に悲鳴を上げた女の子はいるはず。

そう確信して探していると、行き止まりの道に尻餅をついて倒れている金髪の少女の姿が見えた。

「ハ、これ以上近づかないで——」

少女は視線を下の方に向けながら、拒絶の意思を示している。ただ、少女はまだ僕の存在に気付いている様子ではなく、何か他の存在に言っているようだ。

しかしながら、僕の見える範囲では、少女以外の存在が見当たらないのだが、金髪少女は一体何を嫌がっているのだろうか、少女の視線の先を辿ってみると、そこには一匹の野良兎が居た。

それを見て、僕はようやく合点がいった。つまり、あの金髪少女は兎が苦手なのであろう。それなのに、この街で偶に出没する、通行の邪魔をする野良兎に捉まってしまい、耐えきれなくなつて悲鳴を上げた。

取り敢えず、誘拐や変質者では無かつたようではつと一安心していると、兎がじりじりと少女ににじり寄っている姿が見え、慌てて少女を助ける為にその兎を抱き上げて追

い払うのだった。

「お嬢ちゃん、大丈夫かい？」

そう声を掛けると、少女はようやく僕の事を認識したようで、急な展開に頭が追いつかずにぼかんとしていた。それでもすぐに、僕が兎を対処した事に気付いたようで、

「あ、ありがとうございます」

とお礼を言ってくれた。

「君は兎が苦手なのに、兎は君の事が好きなようで……中々難儀だね」

「はい、そうなんです……」

少女は落ち込んだようにそう言って、軽く溜息をつく。

「まあ、狭い道は兎も好むし、なるべく大通りを通った方が良いと思うよ。裏路地には兎以外にも、危ない人とか居るし」

「ええ、今度から気を付けるようにします」

少し説教臭くなってしまうなどと若干後悔しているが、この娘も可愛らしい顔立ちをしているから、良からぬ事を企む輩が潜んでいる所には、余り近づかない方が良さだろう。

「ちよつとお節介だったかな、ごめんね。それじゃあ、僕は立ち去るとするよ」

「あ、あの、お名前を聞いてもよろしいですか？」

別に名乗るような事もしていないので、その少女の言葉はうやむやにしてマヤの待つ文具店に戻ろうと考えていたが、ふと自分にはもう一つの名前がある事を思い出した。

「僕はサントス。じゃあね」

そう言つて僕は、元来た道を引き返すのであった。

ちなみにサントスつていうのは、僕が高校生の頃から使っているペンネームだ。

「サントスさん、ありがとうございます！」

後ろから聞こえる声に、礼儀正しい良い子だなと思いつつ、ペンネームを大声で言われる恥ずかしさから、僕は振り返らずに片手を上げて、手を振るのであった。

さて、最近シズは何かと少女と遭遇しているが、その少女達とこれから長い付き合いになるなんて事は、まだ知らない。

世の中は狭い。でも裏を返せば、それって皆がご近所さんって事だよ

マヤとゲームセンターに行った日から、数日経ったある夜の事。僕は凜から一通のメールを受け取っていた。

内容としては、仕事があるので明日の朝一で来て貰えないかというものだ。

「これは、副業の方かな」

僕の言う副業というのは、税理士として代理で確定申告をしたり、行政書士として会計記帳業務を行ったりというもので、今回だとこの時期だから多分、年次決算処理の業務だろう。

ちなみに本業は小説家だからな。

「そうか、もう4月になったのか」

そういえば、明日はマヤの始業式だっけと思いつつ、明日から始まるであろう年一回の業務の為に、僕は早い時間に床に就いたのであった。

ヒビヒビヒビヒビヒビヒビ

翌朝、相変わらず6時半に設定してある目覚ましに起こされた僕は、着替えて、顔を洗って、家族の分も含めて朝食を作る。そして、朝食を作り終わると大体7時過ぎになり、マヤが起きてくる。

「ふわあくあ、おはよう兄貴……」

「おはよう、マヤ。朝食は出来ているから、顔洗ってきたら食べようか」

「うん……」

マヤはまだ寝ぼけている様子で、半分夢の世界の住人になっているようだ。これはきつと昨晩夜更かししていたんだろうな。

今日から学校だというのに、そんな調子で大丈夫かと思っかけていたが、自分も中学生の頃は朝弱くて、中々起きられなかったことを思い出したために、余裕で間に合う時間帯に起きていてるだけ、マヤの方がよっぽど立派だなと思わざるを得ないのであった。

「ねえ、兄貴はどこか出かけるの?」

朝食をもぐもぐと食べながら、僕に尋ねてくるマヤ。

「ああ、今日は会社の仕事があつてね」

「へえー、兄貴って会社で働いていたっけ?」

どうやらマヤは、僕が小説家である事は知っているみたいだが、翠と凜と小さな出版社を経営している事までは知らなかったらしい。

マヤのその反応に若干の寂しさを覚えたが、会社を設立したのが大学生時代で、その時僕達はこの街を離れていた事を考えれば、それは仕方がないのかなと思うのであった。

「まあ、詳しくは端折るけど、そういう事だから、マヤと一緒に出発しようかな」

「じゃあ、兄貴と一緒にに行けるんだね！」

嬉しそうな顔をしてそう言うマヤ。

マヤは、今はこんな可愛い事言ってくれているが、きつと思春期に入ったら、兄貴なんて嫌い！ って言われてしまうんだろ。考えただけで、悲しくなってきた。

自分の心の中で、そんな一人芝居を繰り広げながらも、朝食を食べ終わった僕は、歯を磨いて、携帯と財布を持ち、翠と凜の家もとい会社に行く準備は整った。

丁度、それと同じ位にマヤも制服姿で玄関に現れて、僕達はいってきますと告げて、活気の出たきた街に繰り出すのであった。

「マヤ、学校は楽しいか？」

「もちろん！ メグもチノも一緒だし、とっても楽しいよ」

「そうか、友達は大切にするんだぞ」

僕がそう言ってマヤの頭をぼんぼんとすると、マヤは眩しい笑顔で、うん！ と答え

るのであった。

僕も、翠や凜などの友達に支えられながら、今、自分のやりたい事を出来ているので、友達の大切さは人一倍知っているつもりだ。

だから、ラビットハウスでの勉強会の時も感じたが、マヤにもそういう友達が増えたようで、安心している。是非これから、仲良くやって欲しいものだ。

まあ、この前のあの子達の様子を見ている限りでは、きつと大丈夫だろうけどね。確証は無いけど、大人になっても仲良しな気がする。

さて、取り留めのない話をしながら川沿いの道を歩いていると、赤髪をトルネードにした少女、メグちゃんの姿が遠くに見えてきた。

「おーい、メグ！ おはよう！」

マヤが声を掛けると、メグちゃんもこちらに気が付いたようで、

「あ、マヤちゃん、おはよう〜！ それに、お兄さんもおはようございます」と、挨拶をしてくれた。

本当にメグちゃんもいい子だな、と心の中で感動しつつ、僕も挨拶を返すのであった。

「お兄さん、今日はどこかにお出かけですか？」

「ああ、兄貴ってば、会社に行くとか言ってます」

「会社？ お兄さんって小説家さんじゃあ……？」



メグちゃんの質問にマヤが答えて、更に疑問が増えたらしく、メグちゃんは首を傾げている。何か勘違いされても困るので、ここは素直に答えておこう。

「僕が小説を出している出版社はね、僕を含めて社員が三人しか居ないんだ。だから、僕も物書き兼経理として働いているって訳」

「へえー、兄貴ってそんな事してたんだ」

「お兄さん、凄いですね〜」

マヤもメグちゃんも、僕の答えに納得した様子であった。

ただ、僕が凄いかってというと、それは違う。だって、会社のほとんどの事務を引き受けてくれている凛や、書いた小説が映画化する翠の方がずっと凄く、ずっと頑張っていると思うから。この場では言わないけどね。

と、そんな話をしていると、向こう側からチノちゃんが歩いてきた。

「おはよう、チノ！」

「チノちゃん、おはよう〜」

チノちゃんは、マヤとメグちゃんと一緒に僕が居るのに気付くと、少し驚いたように体をぴくつきとさせている。どこことなく兎っぽいな……。

「おはようございます、マヤさんにメグさん。それにシズさんも」

「おはよう、チノちゃん。それじゃあ僕は別方向だから、学校楽しんできてね」

待ち合わせ場所にチノちゃんも揃って、マヤ達は中学校へ登校するみたいなので、僕はそう言つてチノちゃんがやって来た方向へと、また歩き出すのであった。

しばらく歩いていると、マヤ達の通っている中学校の制服を着た生徒に交じつて、僕の通っていた高校の制服を着た生徒も見かけるようになってきた。

ああ、僕がああの制服に袖を通さなくなつてから、もう5年も経つたのかと思うと、何だか高校生の頃が懐かしくなってくる。

僕がそうやって昔を懐かしんでいると、前方に見覚えのあるツイントールの少女の姿があつたので、声を掛けてみた。

「おはよう、リゼちゃん」

「誰だ！　って、シズか。ちゃん付けは止めてくれよ」

「ははは、分かつたよりゼ。それにしても、よく一回しか会つてないのに僕が分かつたね」

自分で言うのも何だが、これリゼが僕の事を覚えていなかったら、普通に事案だよな。我ながら随分と危ない橋を渡つていたもんだ。

「訓練してるからな。それに、普段世話になつている参考書の作者だし、そりゃ記憶にも残るさ」

「それは作者冥利に尽きるってもんだね。ありがとう、リゼ」

本当に作者としては、こうして実際に読んでくれている読者さんの話を聞くほど嬉しいものは無いな。

そんな会話をリゼとしてしていると、向こう側からこれまた見覚えのある、亜麻色の髪の少女がやって来た。

「あ、リゼちゃんまた会ったね……って、ドーナツをくれたお兄さん！」

「どうやら、あの子も僕の事を覚えていてくれたらしく、少女はそう言ってこちらに駆け寄ってきた。」

「偶然だね。……あの時は、道案内してやらなくてごめんね」

「あ、お兄さんの教えてくれたラビットハウスに行ってみたら、なんとそこが私の下宿先だったんだよ！」

それは何という偶然なのでしょうか。

僕がそれを聞いて驚いていると、リゼが、  
「なんだお前ら、知り合いなのか？」

と尋ねてきた。

だから、その少女と会った経緯を話そうとしたのだが、僕が口を開く前に少女が、

「このお兄さんは、私がこの街に来て迷っていた時に、最初に声を掛けてくれたんだよ

！」

と、紹介をしてくれた。

「へえー、そうだったのか。やっぱりシズって優しいんだな」

「そういうリゼちゃんは、お兄さんとどこで知り合ったの？」

これまでの話の流れで割と確信していたが、リゼと少女は知り合いらしく、会話を花を咲かせている。その会話を盗み聞いているようで悪いが、一つ分かったのは少女の名前はココアというらしい。

ココアちゃんは、リゼのブレザーとはまた違って、セーラー服に桃色のカーディガンを羽織った、可愛らしい姿をしていた。

彼女の下宿先がラビットハウスだという事は、あの高校の方針からすれば、彼女はラビットハウスで働いているのであろう。そう考えれば、あそこでバイトをしているリゼと知り合いなのも、辻褄が合う。

「あ、いけないもうこんな時間！　じゃありぜちゃん、お兄さん、またねー」

「ああ、またな」

「ココアちゃん、学校楽しんでくるんだよ」

朝というのは誰にとってもそうだが、特に学生にとっては忙しい時間帯であり、立ち止まって話し込んでしまった僕達はまた各々の目的地に向かって、やや急ぎ目に歩き始

めるのであった。

「リゼも学校楽しんでおいでよ」

「上級生として、下級生の手助けができるように頑張つて来るさ」

リゼがふつと浮かべた笑みに好感を抱きながら、僕は会社へ、リゼは自分の高校へと歩を進めるのであった。

今日も動き出した街は、夜の間の静寂を打ち破るように、次第に賑やかな雰囲気醸し出してきた。

澄んだ空気に入り混じつて、ふんわり漂ってくる桜の香りは、それだけで今日という日を華やかにしてくれる。始業式や入学式が行われるには良い日だろう。

それに、今日は朝から色々な人と出会う事が出来て、柄にもなく高揚してしまった僕は、飛び跳ねそうな心を抑えながら街をうきうきと歩くのであった。

長所と短所、両方教えてくれるのは家族と友達だけだよ  
ね

ピンポン

翠と凜の住居もとい、我らが出版社にやって来た僕は、チャイムを鳴らして家の主が出てくるのを待っている、何やら家の中からドタドタという音が聞こえてきた。

この音は、慌てている凜っぽい。というのも、もしこれが翠だったら、時間に遅れるのは普通だと言わんばかりに、悪びれることなく現れるからだ。尤も、凜や僕以外の人が居る場合には、翠も弁えて行動しているけどな。

ガチャ

「条河先生、おはようございます」

僕の予想通り、扉を開けてくれたのは凜だった。条河先生と呼んでいるので、凜は今、お仕事モードになっているようだが、所々髪の毛が跳ねているところを見ると、まだ起きてからそう時間は経っていないようだった。

「おはよう、凜。えっと、来るのが早すぎたかな」

「いやいや！ 私が朝一でっってお願ひしてたのに、こちらこそ準備が整ってなくてすみ

ません」

そう言つて申し訳なきさうにしている凜だが、僕としては、凜は氣心の知れた仲間でもあり、普段から僕達三人の中で一番頑張つてくれているから、それぐらいの事だったら全然問題ない。

むしろ、マヤに合わせて家を出てきてしまった為に、凜を急かしてしまったようであつて申し訳ない。

ただ、それを言つたところで、それはそれで凜に氣を遣わせてしまふだろうし、ここは翠に活躍してもらうか。

「まあ、うちの会社には締め切りを守らない常習犯が居ることだし、それに比べれば大した問題はないから大丈夫だよ」

「うう、翠ちゃんみたいにならないように、努力しますね……」

どうやら笑いを誘おうとした言つた僕の言葉は、根っこが生真面目な凜には逆効果だつたようだ。

「それじゃ、僕は中で待たせてもらうから、凜は髪を梳かしてきな」

「はい、そうさせてもらいます」

そう言つて凜は、少し恥ずかしそうにしながら洗面所の方へ向かつたのであつた。

さて、凜が髪を整えている間、居間で待たせてもらおうとして行くと、そこには、凜とは反対にしつかりと朝の支度を終わらせて、優雅にコーヒーを啜っている翠が居た。

「おはよう翠。相変わらず、早起きみたいだな」

「あら、シズ君おはようございます。そういうシズ君こそ、朝はいつも早いではないですか」

「否定はしないよ。子供の頃は起きられなかったのに、年を経るごとに段々起きられるようになってきてね」

翠は僕との会話をしながら、コーヒーを淹れて、こちらに差し出してくれた。

「ありがとう、翠。それにしても、この中では一番真面目な凜が、一番朝に弱いつているのも何か不思議な感じだな」

「先程のシズ君の言葉を言い換えると、それが若いという事なのではないでしょうか」

「そうかもな。一つ下の凜に、僕達も色々任せっぱなしにしているから、凜も疲れているだろうし全然いいんだけどね」

凜は、翠と僕の担当編集者であり、僕達の会社の代表であり、その目覚ましい仕事ぶりといったら、本当に頭が上がらない。

だから、僕は凜からの要望があれば、無理をしてだってそれを叶えてあげたいと思っているのだ。今回の寝坊とはまた別の話にはなるけどな。



「ん、このコーヒー美味しいな。さすがはラビットハウスに通い詰めていただけあって、翠も淹れるの上手だよな」

「マスター直伝の技ですよ。今度、また高校生の時のみたいに、三人でラビットハウスに行きましょうか」

翠は、にこにこ笑顔を浮かべながら、そんな提案をしてきた。

ところで、翠はマスターが亡くなったことを知っているのだろうか。もし知らずに行ってしまったら、その晩は翠を慰めないといけなくなるだろう。翠はマスターの事を凄く慕っていたから。

「翠の提案に僕は大いに賛成だけど、翠の原稿が仕上がった状態で行かないと、凜と高校生の時みたいな追いかっこが始まりそうだな」

「ふふ、それもまた楽しそうですね」

お前は悪魔か。凜にこれ以上心労を掛けてどうするんだ、と思いつながら、翠にジト目を向けていると、

「もちろん、凜ちゃんも楽しめる程度にしますよ」

と、翠は僕の心の中を読んだように言うのであった。

まあ、翠がそう言うんだつたら問題ないだろう。翠の観察眼は素晴らしく高性能だから、きっと有言実行してくれるはず。

それに、凧も事務仕事ばかりでなく、少しぐらい外で走り回っていた方が健康にもいいだろうしな。

こうして、本人のあずかり知らぬところで、勝手に追いかけてこの実施が決定されていると、そこにちやうど凧が戻ってきた。

「お待たせしました、条河先生」

今ここにいるのは身内だけだというのに、きりつとした態度をする凧。そういう公私の分別をつけて、すぐに切り替わるのは、凧の良い所のひとつだよな。

「それで、今日の要件は何ですか？」

「はい。今年も3月が終わり、会社も新年度に突入しました。それで、条河先生には例年通り、決算の処理をお願いしたいんですが、よろしいでしょうか？」

「勿論大丈夫だよ。それは僕の仕事だからね、任せてよ」

やっぱり、今日凧に呼ばれた理由は、予想通りのものだった。

凧のその言葉を聞いた僕は、早速領収書のファイルを取り出して、仕事を始めようとしてみると、凧が更に口を開く。

「それと条河先生。先生の次の作品を今夏に発売したいのですが、大丈夫ですか？」

おお、今日は盛り沢山だな。まさか本業の方まで言われるとは思っていなかった。

「それって新規の作品ってことでもいいのかな？」

「はい。今回は木組みの家と石畳の街を題材にして書いていただきました」

そこで僕は一つ疑問を覚えた。今、凧の言った題材を使って小説を書くとしたら、それは翠の書いた『うさぎになったバリスタ』で評価された、実在する童話の中のような街が舞台という点の二番煎じとなってしまう。

そんな小説を、一体誰が評価してくれるのだろうか。

「……悪いけど、凧の期待には応えられそうにない」

そう僕が言うと、凧はそれを予想していたかのように僕に告げる。

「条河先生は心配し過ぎなんですよ。高校生の頃からそうでしたが、自分の作品に自信を持つてください！」

「いや、でも僕の書いた小説は現に、翠の比べて大した部数売れてないしな……」

このまま書いてしまつては、翠の下位互換にしかないのではないかという不安が頭から離れない。

凧と僕がそんな話をしていると、これまで話に加わっていなかった翠が話し始めた。

「凧ちゃんの言う通り、シズ君はもう少し自分を褒めてあげるべきだと思います。だって私が未だに2作目を書けずにいる中、シズ君はもう何作も出版しているではないですか。それって凄い事ですよ」

にここつと笑みを浮かべて僕にそう言ってくれる翠。

ああ、そういうえば文化祭の時も同じことを言われたつけ。懐かしい記憶だ。そう、あの時だつて翠と凜の方が正しかったんだ。

だったら、僕は信じないといけないよな。二人の言葉を。

「僕は、翠みたいに大層な文章は書けない。でも、二人がそう言ってくれるんなら、精一杯やってみるよ」

「そうですか！ 条河先生だったら、絶対大丈夫ですよ！」

ほつとした表情になつてそういう凜。

果たして、そんな凜の期待に応えられるかは分からないのだが、僕を信じてくれる人が居るのであれば、最大限の努力を尽くして見せようと思う。

「翠も凜も、僕の背中を押してくれてありがとうな」

「シズ君には大きな借りがありますからね。それに、私の本心を言っただけですから」

「私も、シズ先輩が良い作品を作ればと思っただけですのぞ」

僕は本当に良い友達を持ったようだ。翠と凜には感謝してもしきれない。

さて、取り敢えずは与えられた仕事を片付けて、翠にも負けない小説を書き上げられるよう頑張りますか。

街の中では、新たな出会いが満ち溢れていた春の日。

た。かつて文芸部3兄妹と呼ばれた仲良し3人組は、一層その友情を強固にするのであつた。

パンは作ったことないけど、蕎麦なら作ったことあるよ

4月に入ってから、半月ばかりが経過した。

桜は花盛りを終え、春の陽気で浮ついていた街も段々と日常に戻ってきた今日この頃。木組みの街では爽やかな風が吹いていて、半袖になるにはまだ早いものの、初夏を感じさせる陽気へと移り変わってきていた。

こんないい天気の日に出ないのはもったいない。というわけで、僕は仕事という枷から抜け出して意気揚々と街へ繰り出したのであった。目的地はラビットハウスだ。

「本当に今日は心地良い天気だな。翠も来ればよかったのにな」

先程、翠と一緒にラビットハウスへ行かないかと尋ねてみたのだが、まだ心の準備が……と言われてしまった。無理強いするわけにもいかないし、僕は今回も独りだ。

そうそう翠と言えば、近頃またふらふらとし始めたらしく、凜が困っていた。しかも高校生時代とは違って、翠の行動範囲が街一つなものだから、最近の追いかっこは翠に軍配が上がっているようだ。

ただ、凜もそんな翠に対抗するために、色々なアイデアを試しているようで、この前は翠の携帯のGPSを追跡していた。……なんだか楽しそうだな。まあ、翠もそろそろ

GPSによる追跡に気付いて携帯を持たなくなるだろうから、また振出しに戻ってしまうわけだ。今から凜の苦勞が思いやられる。

さて、そんなことを考えているうちにラビットハウスが見えてきた。

今日は何を飲もうか。チノちゃんの淹れてくれるコーヒーは美味しいから、何杯でも飲めてしまう。さすがはマスターのお孫さんだよな。

僕はそのまま鼻歌でも歌いそうな気分ですラビットハウスの扉を開けようとするのだが、その直前で扉に看板が下がっていることに気付く。

「ん、看板？ Close……」

どうやら定休日のようなだ。最近は何々と仕事が忙しかったので、今日はゆっくりとラビットハウスで過ごそうと思っていたのだが、当てが外れてしまった。

うーん、折角ラビットハウスまで来たのに、このまま帰ってしまうのはもったくない。だけど、今日はラビットハウスの気分だったから、甘兎庵とか別の喫茶店に行くのはちよつとなあ……。

僕がそうやってラビットハウスの前で悩んでいると、「あ、お兄さんー！」と声がかけられた。聞き覚えのある声だと思つて声の方に顔を向けてみると、そこには手を振るココアちゃんと、一緒に歩く千夜ちゃんの姿があった。

「ああ、ココアちゃん。それに千夜ちゃんも」

「あれ？ 千夜ちゃん、お兄さんと知り合いい？」

「そうなの。うちのお得意さんなのよ」

どうやらココアちゃんと千夜ちゃんも知り合いい、というか友達のようなのだ。

「それでお兄さん。こんな所でどうしたの？ 今日ではラビットハウス、お休みだよ？」

「うん、そうみたいだね……。昔は基本毎日やっていたから、すっかりその感覚でいたよ」

僕が高校生の頃は、マスター（現ティッピー）が個人でやっていたため、臨時の時を除いて無休でやっていた。しかし今のラビットハウスは、中高生の3人でお店を回している。つまりだ、毎日営業なんてできるわけがない。少し考えれば分かる事だったのに、何故気付かなかったのか。

「ねえココアちゃん。もしよかったら、シズさんもパン作りに参加してもらわない？」

「あ、それいいね！ ねえお兄さん。私たちこれからラビットハウスで看板メニュー開発するんだけど、一緒にどうかかな？」

「僕が参加してもいいのかい？」

「もちろん！ 大歓迎だよ！」

こうして僕は、ココアちゃん主催のパン作りに参加することになった。

ラビットハウスに入ると、既に残りのメンバーであるチノちゃんとリゼはエプロン姿



で待っていて、準備万端のようだった。僕の姿を見て二人とも驚いていたが、すぐに笑顔で僕の参加を許可してくれた。

「同じクラスの千夜ちゃんだよ」

「今日はよろしくね」

ココアちゃんと千夜ちゃんもエプロンに身を包み、僕もチノちゃんのお父さんで今のマスターであるタカヒロさんのエプロンを借りてキッチンに集合していた。それにしてもこのエプロン、デフォルメされた兎の柄がついていて可愛らしいな……。

「こっちがチノちゃんと、リゼちゃん」

「よろしくです」

「よろしく」

今は、お互いの自己紹介をしている。聞けば、ココアちゃんは先日僕とリゼに会った後、公園で千夜ちゃんと会ったらしい。そして意気投合し、仲良くなったようだ。

「そして、お兄さん！」

「おいおい、名前で呼んでやれよ……」

「条河静です。今日はよろしくお願ひします」

リゼのツツコミが入りつつ、僕の紹介もココアちゃんがしてくれた。ここにいる全員

とは一応顔見知りだけだ。

それにしても、中高生に交じって黒一点とは、皆の若さが眩しすぎてなんだか居心地が悪いな。

「おぬしもまだまだ若いじゃろ」

僕がそんなことを思っていると、ティツピーから呆れたような口調でツツコミが入った。マスター、そんな簡単に喋っていいんですか。普通に怪奇現象ですよ。

「あら、そちらのワンちゃん……」

「今のは私の腹話術です。それにワンちゃんじゃないです」

腹話術というのはあまりに苦しい嘘だと思いが、幸いにして千夜ちゃんはスルーした。

「この子はただの毛玉じゃないよ」

「まあ、毛玉ちゃん？」

「もふもふ具合が格別なの！」

「癒しのアイドルもふもふちゃんね」

「ティツピーです」

……話の原因を作ったのは僕だが、よく話が続くものだ。

僕が変なところに感心していると、困った表情をしたリゼと目が合った。どうやらリ

ゼはこつち側の人間のようだ。

「ティツピーは、アングラウサギっていう品種で、全身を長い被毛に覆われているのが特徴なんだ。ちなみに最も古いウサギの品種って言われていたりもする。本当かどうかは分からないけどね」

僕が説明をする、皆へえ〜という顔をしていた。

「シズ、詳しいんだな」

「まあね。昔から動物は好きだったから」

さて、兎の話は切り上げて本題に戻ろう。

「さあ、やるよ。みんなパン作りをナメちゃいけないよ！ 少しのミスが完成度を左右する闘いなんだからね」

「ココアが珍しく燃えている。このオーラ、まるで歴戦の戦士のようにだ！」

ココアちゃんの実家がパン屋さんのようで、リゼの言う通りやる気に満ち溢れている。だからといって……。

「今日はお前に教官を任せました！ よろしく頼むぞ」

「サー！ イエツサー！」

それはさすがにどうかと思う。リゼってミリオタなんだろうか。

「それじゃあ、各自パンに入りたい材料を提出！」

ココアちゃんの号令によって、ココアちゃんからはうどん。千夜ちゃんからは自家製の小豆と梅と海苔。チノちゃんからは冷蔵庫にあったというイクラ、サケ、納豆、ゴマ昆布が提出された。

……これってパン作りだよ。いや、僕には手持ちの食材がないので何も言う権利はないが……。

ちなみに、リゼはいちごジャムとマーマレードを持ってきていた。うん、良心が居てよかった。

「まずは強力粉とドライイーストを混ぜて〜」

「ドライイーストって、パンをふくらませるんですよ？」

「そうそう、よく知ってるね。チノちゃん偉い偉い。乾燥した酵母菌なんだよ」

ココア先生のパン作り講座は、生地作りから始まった。意外と小麦粉使うんだと思いなながら、ココアちゃんとチノちゃんのやり取りを見ていると、急にチノちゃんが怖がり始めた。

「そ、そんな危険なもの入れるくらいなら、ぱさぱさパンで我慢します!」

……一体、チノちゃんは何を想像したんだろうか。

その後、水を投入して皆でこねる作業に入った。

「パンをこねるのってすごく体力が要るんですね」

「腕がもう動かない……」

チノちゃんや千夜ちゃんは既につらそうにしている。かくいう僕も、最近あまり運動していなかったせいか結構疲れてきた。

「リゼさんは平気ですよね？」

「な、なぜ決めつけた？」

確かにリゼはまだまだ元気そうだ。ココアちゃんとは違って、パン作りに慣れているわけではなさそうなのに凄いな。

「リゼは何かスポーツとかやっているの？」

「いや特になにかしているわけではない。でも、普段から訓練をしているからな！」

いやにキラキラした笑顔を浮かべるリゼ。さっきの教官発言といい、軍隊にでも憧れているんだろうか。まあ、趣味は人それぞれだから……。

「リゼさんはお父さんが軍人なんです」

「そうそう、最初に会ったときは銃を突き付けられたっけ」

チノちゃんとココアちゃんから補足説明が入った。なるほど、親の影響というわけか。それは納得した。

「リゼはお父さんが好きなんだな」

その言葉に、ぼつと顔を赤らめるリゼ。

「そ、そんなことはない！ 親父のことなんか好きなのじゃないだろう！」

「あれ、リゼちゃん照れてるの？」

ココアちゃんが煽るような発言をすると、リゼちゃんは照れのあまり、ココアちゃんの胸倉を掴んで揺さぶり始めた。

「お、落ち着いてリゼちゃん！ 冗談、冗談だよ！」

あー、申し訳ないココアちゃん。でも、照れてるリゼは可愛かったな。

さて、そんな軽いハプニングを起こしながらもパン作りは順調に進んでいき、今は発酵させるために生地を寝かしているところだ。生地を寝かせるはずが、皆も寝てしまったので僕はマスターとお話ししていた。

「ラビットハウスも賑やかになりましたね」

「そうじゃのう。あのココアという娘もあつという間に店に馴染んじまった」

「嬉しそうですけど、マスターはここを静かな喫茶店にしたかったのでは？」

我ながら嫌な質問だとは思ったが、何年も前からマスターを知っている身としてはどうしても尋ねてみたかった。

意外にも、マスターは悩むことなく答えてくれた。

「シズよ、時代は変わっていく。ワシはもう死んだ身じゃ。後のことは、息子とチノが好きなようにすれば良い。それに……」

ピピピピ　ピピピピ

マスターが言葉を切ったところで、ちようどキッチンタイマーが鳴ってしまった。皆も起きてしまったので、この話はまた今度だ。

それから、僕は発酵してふつくらとした生地を各々好きなように成形した。僕は芸術センスが無いので、至って普通の形に整えた。こういうのは、凜が上手なんだよな。

「チノちゃんはどんな形にしたの？」

「おじいちゃんです。小さい頃から遊んでもらってたので」

「おじいちゃんっ子だったのね」

千夜ちゃんの質問に答えるチノちゃん。生地を見てみると、確かにマスターの生前の姿に似ている。しかし、生地はこれから焼かれるので……。

「ではこれから、おじいちゃんを焼きます」

「ウワァーッ！」

ここだけ聞くと、まるで火葬だな。ティッピーが悲鳴を上げる気持ちもよく分かる。しっかりと思わず笑ってしまいそうになってしまったが、割とブラックジョークだよな。

「千夜ちゃん、お兄さんちよつといい？」

「なに？」

「なんだい？」

チノちゃんとマスターが軽いコントを繰り広げていると、ココアちゃんがなにか楽しそうな表情をしながら、僕と千夜ちゃんの方へやってきた。

「ジャジャーン！ 千夜ちゃんとお兄さんにおもてなしのラテアート！」

「わあ、かわいい！」

「うん。可愛く描けているね」

ココアちゃんが作ってくれたラテアートは、真ん中に兎と、その周りに花びらの模様が描かれていた。

「えへへ、今日は会心の出来なんだ」

「味わっていただくわね」

「僕も昔何度か教えてもらったけど、こんなには上手にできなかったな」

帰ったら、練習してみようかな……。少し昔のことを思い出してしまった。

そのせいで、ココアちゃんが折角作ってくれたラテアートだったのに、僕はしばらく感慨に浸って飲むことができなかった。

さて、僕がそんなことをしている内に、いつの間にかパンが焼き上がっていた。

全員でいただきますを言って、早速実食してみる。

「おいしい！」

「フカフカです」



「さすが焼き立てだな」

「これなら看板メニユーにできるね」

確かにここまで焼き立てのパンを食べたのは初めてだ。でも、さすがに焼きうどんパンも梅干しパンも、特に焦げたおじいちゃんを看板メニユーにはできないと思う。

「そういえばココア。まだ焼いているのがあったけど、あれはなんだ？」

「あつ、あれはねー」

そう言うのと、ココアちゃんはオーブンから残りのパンを取り出して見せてくれた。

「じゃーん！ ティツピーパン作ってみたんだー！」

「おお、看板メニユーはこれでいけそうだな」

見た目は可愛らしく、しかも表面がもちもちとしてとても美味しそうだ。

「えへへつ、おいしくできるといいんだけど」

いざ一口齧ってみると、中からは甘いいちごジャムが溢れ出てきた。口の中でパンと程よく混ざり合い、パン屋さんと比べても引けを取らない美味しさだった。

ただ、一つ問題があるとすれば溢れ出るジャムが、まるで血のように見えることだろうか。なんとというか、食欲が減退してしまいそう感じた。

すると、リゼちゃんが思いを代弁するように言ってくれた。

「なんか、エグいな……」

すべてはこの一言に集約されていた。

早いもので、外はもう夕暮れ。今日は一日中ラビットハウスでのんびりと過ごす事ができて良かった。それでは、そろそろ帰らなくては。

「皆、今日はありがとう。僕はそろそろお暇するよ」

「そうね、私も帰らなくちゃ」

「もうこんな時間か。あつという間だったな」

ここに住んでいるチノちゃんとココアちゃん以外は、帰る支度を始める。

「千夜ちゃんもリゼちゃんも今日は来てくれてありがとう。お兄さんもまた遊びに来てね」

「ああ。次の機会には、皆に今日のお礼をしないとイケないな」

といつても、僕には大したことはできないんだけどね。せいぜいが手土産を持っていく程度だろう。あ、後は勉強を教えるとか。

そんなこんなしている内に、リゼちゃんと千夜ちゃんは帰る支度が終わったようだ。

「それじゃあまたね」

「またな」

「また来てくださいな」

「またねー！」

「また」

またねの大合唱が、夕暮れの木組みの街に静かに響く。

そうして彼女達は、笑顔にちよっぴりの寂しさが混じった顔をして、次に会う時までの別れを告げるのであった。

失敗に挫けない。よく言われるけど難しいことだよ

若葉の生い茂る5月の頃。僕は、翠と凜と一緒に買い物に出かけていた。

事の始まりは、今日の午前中のこと――

ガシャン！ ガシヤガシヤン！

それは翠と凜の家で仕事の話をしていた時のこと。いつも通り、凜と僕は居間で次の小説について打ち合わせをしており、そこに翠が気を利かせてコーヒーを淹れてくれようとしていた。

すると突然、翠のいる台所の方から尋常じゃない量の何かが割れる音が聞こえた。

「翠、どうした！」

「大丈夫ですか、翠ちゃん！」

何があつたんだと心配になり慌てて二人で翠のもとに駆け寄ると、そこには見るも無残な光景が広がっていた。

「あらら、やっちゃいました」

どうやら食器棚の皿やカップが雪崩を起こしたようで、床で全部仲良く割れてしまっ

ていた。無事だったのは、翠が手に取っていたコーヒークップただ一つだけ。

一体何をしたらここまで派手に被害を出せるんだ……。翠との付き合いも長いが、たまに理解に苦しむことがある。

「取り合えず、怪我はないか？」

「大丈夫ですよ。傷一つありません」

これだけ足元に陶器やガラスの破片が散乱していながら無傷というのも不思議な話だが、ひとまず安心した。不幸中の幸いといったところだろうか。

となると、心配するべきはさつきから啞然とした表情で棒立ちになっている凧だな。

「凧、翠に悪気はないようだし、どうか許してやってくれないか」

「凧ちゃん、本当にごめんなさい」

「いや、それは良いんですけど……。今晚どうしましょうか……」

確かに。割れたものをよく見てみると茶碗や大皿なんかも含まれている。これでは料理を作っても食卓に持っていけない。それに、今日なんとかなったとしても皿は生活必需品だ。明日、明後日には困ってしまう。

「それではこれから買いに行きましょう。せつかく割れてしまったんですから、新しいものは前とは違った感じのがいいですね」

「だな。会社の備品として購入しておけば税金も抑えられるし、むしろ幸運だったかも

しれないぞ」

二人で凧を励ますと、凧の青ざめた顔も段々と戻ってきた。というか、むしろ落ち込むべき翠が何故励ます側にまわっているのか。凧も少しぐらひは翠みたいな鈍感さを持つてもいいのにな。まあ、翠にも凧の真面目さを見習ってほしいところではあるが。

「シズ先輩も翠ちゃんも、ありがとうございます。そうですね。食器は消耗品ですもんね」

「凧ちゃんも立ち直りましたし、それでは早速——」

「その前に翠ちゃんは反省して、ここの片付けをなさい！」

そうして割れた破片を協力して処理した僕達は、こうして皆で食器を買いに来たというわけだ。

「こうして三人で街を歩くのも久しぶりだな」

「高校生の時はよく放課後に街を散策していましたよね。主に翠ちゃんが部室から逃げるせいでしたが」

「あれも青春時代のいい思い出ですよ」

諸悪の根源とまではいかないが、僕らの引き起こす出来事の大半は翠が原因だということ。おかげで振り回す翠、振り回される凧という関係が出来上がってしまった

いる。僕？　僕はその時々によつて翠側についたり凛側についたり、どっちつかずの立場だ。

しかし、別に振り回すのは悪い事ではない。だつて翠が行動を起こしてくれるから、僕の人生は毎日が楽しい。そしてそれは凛も同じ考えだろう。

「凛ちゃん、最初は何を買いに行くんですか？」

「まずは食器ですね」

「それなら川沿いの店が品揃え抜群だな」

「でしたら、そこに行きましようか。シズ先輩の勧めなら間違いないでしょうし」

木組みの街には何でも揃う大型ショッピングセンターなんてものは存在しない。せいぜいが食料品を扱うスーパー程度だ。だから日用品を買うときはそれぞれの店に行つて買わなければならない。

今どき珍しいと思うかもしれないが、なんせ木組みの街は田舎だ。人と人の距離が近い個人商店の方が風土に合っている。

その代表例がラビットハウスだ。あそこに行く理由はコーヒーを飲みたいからだけでなく、マスターに会いたいからというものもある。一杯のコーヒーを通じて話に付き合つてもらふ。それはひと時の人情味あふれる、癒しの時間だ。だから、ラビットハウスには僕や翠のような根強いピーターが居る。

そうこうしているうちに目的の店が見えてきた。しばらく来ていなかったが、昔とまったく変わっていない。その事実にしほっとしつつ中に入ると、棚一面に並べられた食器が僕達を出迎えてくれた。

「わく、たくさん種類がありますね！」

「あ、凜ちゃん見てください。兎の箸置きがありますよ」

二人が品揃えに満足してくれたようで良かった。一応これで木組みの街出身という面子も保つことができたな。

それから僕達は、小一時間商品を物色して必要なものを全部買い揃えることができた。ただ、手で持つて帰るには少々量が多くなってしまったので、一部は梱包してもらい送ってもらうことにした。今は店の方がその準備をしてくれているところだ。

「それじゃあ僕は、先に外に出ているな」

それだけ言い残すと、僕は店の外に出る。そして、二人に気付かれないようにそつと店から離れた。

先程、思い出したことがある。そういえば、二人に引つ越し祝いを渡していなかった？ という割とヤバイ事実を。いや、弁明のしようがない程、すっかり頭から抜け落ちていた。というわけで、この際にお祝い品の品を買ってこようとしているわけだ。

木組みの街にいくつかある食器店の内、さっきの店とは別に可愛らしいカップが売つ



ている店が近くにある。その店でペアカップでも買おうと思つて急いで行つてみると、そこには見知つた先客がいた。

「——ご飯にしか見えないです」

制服姿のココアちゃん、チノちゃん、リゼに加えて何故か大きなカップの中に入つて  
いるティッピー。どんな状況なのか分からないが、これはチノちゃんの言う通りご飯に  
しか見えない。

「お、シズじゃないか」

「こんにちは。三人とも奇遇だね」

「お兄さんも面白い物ですか？」

「うん。ちよつと贈り物を買おうと思つてね」

チノちゃんとリゼと話していると、ココアちゃんがよさげなカップを見つけたようで  
そつちにトコトコと歩いていく。

「これなんていいかも」

そう言つてココアちゃんがカップを手に取ろうとすると、偶然にも隣の女の子も同じ  
ことを考えていたようで、手が重なり合つてしまう。

「こんなシチュエーション、漫画で見たことあります」

「よく恋愛に発展するよな」

「創作上だけの出来事かと思っていたけど、現実でも起こるんだね」

まるで意図されたかのような光景に思わず揶揄する僕達。それを聞いてかココアちゃんも相手の女の子を意識するような態度をとる。というか、あの子見たことあるな……。

「あれ、よく見たらシャロじゃん」

「リ、リゼ先輩！ それに、この前のサントスさん？ どどどうしてここに……」

サントスの名を聞いてようやく思い出した。見覚えがあると思つたら、野良兔に怯えていた子か。

ちなみにサントスとはその時に名乗った僕のペンネームだが、正直仕事以外で人に呼ばれると凄く恥ずかしいな。そもそも仕事と関係ない場でペンネームを名乗っちゃうとか、ナルシストか！

「リゼさん、知り合いですか？ それに、サントス……う？」

「私の学校の後輩だよ。ココア達と同年。サントスはコイツのペンネームだろ？」

「代わりに説明してくれてありがとう……」

羞恥で悶えている僕には説明する余裕なんてないから、リゼが説明してくれて助かった。後、こんな作者の名前を憶えていてくれて、本当にありがとうございます。小説家冥利に尽きますわ。

僕が変な感動をしているのをよそに、金髪少女シャロちゃんとの会話は進む。

「リゼ先輩はどうしてここに？」

「バイト先の喫茶店で使うカップを買いに来たんだよ。シャロは何か買ったのか？」

「いえ、私は見てるだけで十分なので」

そう言うときシャロちゃんは恍惚とした表情でカップを手に取り、その良さを語ってくれる。陶器フェチとでも言えればいいのだろうか。

「それは変わった趣味ですな」

「え、お前が言う……？」

「まあまあ、好きなものは人それぞれだからね」

ココアちゃんの言葉にドン引きするリゼ。いや、ミリオタ気味な君も多分同じ仲間に分類されると思うよ。かくいう僕も、人から見れば変わっていると思われる趣味は持っているし……。

「リゼさんとシャロさんは学年が違うのいつ知り合ったんです？ シズさんにいたっては学生ですらないですし」

「それは、二人とも私が暴漢に襲われそうになったところを助けてくれたの」

ん？ 暴漢？ リゼと顔を見合わせるとどうやらそつちも話が違う感じになっているようで、疑問の顔を浮かべていた。

「へえ、かつこいいな！ リゼちゃんは銃を持っているけど、お兄さんも見かけによらず強いんだね」

「ちがーう！ 本当はうさぎに怖がっていたところを助けたただけだ！」

「ああ、言っちゃダメです！」

やはり、リゼも同じ経緯でシャロちゃんと知り合ったようだ。それにしてもこの街に住んでいて兔が苦手とは、本当に難儀なものだな。

その後、シャロちゃんによるティーカップの解説や、彼女がカフェインを摂りすぎると異常なテンションになることが判明したり、リゼが本物のお嬢様だつてことを認識したりと少しの間だが楽しい時間を過ごした。そして僕はここに来た目的をすっかり忘れてしまっていた。

「チノちゃん、お揃いのマグカップ買おうよ」

「今日は私物を買いきたんじゃありませんよ」

「先輩！ こ、このカップなんて色違いで可愛くないですか？」

「本当、可愛いな。よし、買うか。シャロにひとつあげるよ」

皆がそれぞれカップを買おうとしたところで、ようやく僕も思い出す。まずい、早く買つて戻らないと。

店内をざっと見渡すと、シンプルながら洗練されたデザインのマグカップが目にと

まる。翠が好みそうな感じだ。それに色違いのものがもう一つあるから、これにしよ  
う。

僕は即決し、すぐに会計を済ませる。後は戻るだけ……と思ったその時、店の扉が勢  
いよく開かれた。何事かと思つて目を向けると、そこには眉を吊り上げた凜が居た。

「見つけましたよ！ シズ先輩！」

「遅かったか……」

「荷物が多いのでシズ先輩の手が必要なんです！ だから早く行きますよ！」

そう言われ、さつと腕に手を回されて引きずられる僕。翠で手慣れているためか、そ  
の一連の動作には微塵も迷いが無い。

そうして僕は呆気にとられる四人の姿を見ながら、真面目で厳しい後輩に連行されて  
しまうのだった。ちなみにマグカップは喜んで使つてくれました。

シズが連れていかれた後の店内では――

「あのお姉さん、お兄さんの彼女さんかな？」

「まさか。ただの後輩だろ」

「でも、お揃いのマグカップを買つていったわよね？」

「それにシズさんは小説家ですし、後輩ってどういうことでしょう」

恋バナが好きなのは女子の性というもの。あいにく真実を知っているティツピーは、カップの中で眠りこけてしまっている。

こうしてシズのあずかり知らぬところで、少女達の間で恋の噂が流れてしまうのであった。